ソウルスティール！

都筑遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソウルスティール！

【Ｎコード】
Ｎ７５５３Ｘ

【作者名】
都筑遥

【あらすじ】
魔界随一の大帝国・ハインシュベルクの魔王直系第二子に生まれながらある理由によりソウルには王位継承権が存在しなかった。
それでも特に何不自由なく暮らしていたソウルへとある日凶報がもたらされる。従姉ルクエールによる第一王位継承権簒奪だ。
元老院より第一王位継承権の承認を得たルクエールはソウルへと宣告を下す。
「私はお前を愛人にするわ」――
己の身と誇りを守るため、ソウルは諦めていた王位簒奪へと乗り出

した！

そんなあらすじですがノリは軽いです。

プロローグ

「ソウル」
「――何だ、ルクエール」
　女の声に呼び止められ、ピクリと肩を震わせた後若干嫌そうにソウルは足を止めて振り返った。その視線を受け止め、ふふんとルクエールは髪を掻き上げ傲然と笑う。
「今さっき、正式に元老のジジィどもから要請されたわ。次の王は私よ、ソウル」
「だったら何だ。俺には関係ない」
　溜め息をついて、ソウルは面倒そうにルクエールの隣をすり抜け立ち去ろうとした。付き合って楽しい話でもない。
「関係無くないわよ」
「俺を追放でもするか？」
　目を細めふんとソウルは鼻で笑う。有り得ない事だったからだ。例えルクエールが王になってソウルの追放を望んだとしても、何もなければ周りがそれを許すまい。ソウルは自他共に認める天才だからだ。あらゆる分野において。
「まさか。私がお前を追放なんてするはずないでしょう？」
「ハッ。言っとくが俺様はお前の治世に手を貸すつもりは無いぞ。何でも勝手にすればいい。俺を巻き込むな」
「ふっ。相変わらず強気なのね」
「当然だ。俺様に恐れるものなど何もない」

腕を組み、にやりと凶悪に笑って威嚇するようにルクエールを見上げるが、相手はその目を捕えて嫣然と微笑って見下ろして来た。

(——?)

何かが違う、とソウルの中で警鐘が鳴った。

「ソウル」
「……何だ」
「私はお前を愛人にするわ」
「…………。は?」

何の聞き間違いだ?

「お前の血を王家に残す気はないけれど、私はお前を気に入ってるわ。安心なさい。夫にはしないけれど私が一番可愛がるのはお前よ、ソウル」

すいとそのまま屈み込むと、唖然としたソウルにそのまま口付けた。
柔らかい女性の唇が離れて、数秒。フリーズしていたソウルにようやく再起動が掛かる。

「なっ、なっ、何しやがんだァ——ッ!」

女に。女からキスされた。
ファーストキスは絶対相手に目を瞑ってもらって自分が上から唇と落としたかったのにッ。

「貴様ァッ！　この屈辱、忘れんぞっ！」

涙目になって怒鳴るソウルにやだ可愛い、とか言ってルクエールルはぎゅうとその体を抱きしめた。

ソールスティーリッヒ・バル＝アク・ハインシュベルク千と二百六十六歳。

この日生まれて初めて、諦めていた王位簒奪の野心に火を付けた。

第一章　欠落王子と欠落魔術師

「っがァァァァ！　今思い出してもはらわたが煮えくりかえるわーっ！」
「それはソウルが隙あり過ぎなんだろーな」
　この日何度目かのソウルの絶叫に、パリパリとスナック菓子を食べながら、律義にソウルの異母兄であるラーは同じ相槌を繰り返した。
いや、同じセリフを繰り返しているだけなので律義とは言えないか。明るい金髪と赤い瞳、顔立ちは若干きついが申し分のない美形で、絶対将来追いこしてやると誓う程度には背も高い。怠けて殆ど動かないくせにスタイルは一向に崩れないのだ。
今年で七千を数える異母兄ラーとは対照的に、ソウルの色彩は若干鈍い。灰銀の髪と研がれた鉄色の瞳。人の体年齢で言えば十一、二程の幼体なので歴然たるラーとの差がちょっと悔しい。

「貴様ァッ！　大っ体貴様それでいいのか！　王の直系は貴様なのだぞ！！」
「あァ、別にどうでもいい。めんどい」
「『面倒』まで平仮名にするな余計気が抜けるわ！」
「つーか人の部屋来てどうなんだお前」
　怒鳴り散らすわ部屋の主に文句付けるわ。
面倒そうに呟いた後、次のセリフはやはり。

「まァ別にいいけどな」

大体の事にやる気が無いのでそこに落ち着く。こいつに沸点とい

うものはあるのかと思う程に、ラーが感情をを動かす事そのものがあまり無い。
「貴様が真っ当に王位継承権を守っていればこんな事にはならんかったんだ！」
「人に頼るなよ。お前だって直系だろ、一応」
「判っておるわ！」
　イライラとソウルはラーに怒鳴り返した。
ソウルとラーの父は現在の魔王だが、ソウルには王位継承権が生まれた時から存在しなかった。
理由は、ソウルが人間とのハーフだから。
別にそれはそれで構わなかった。判らなくはなかったし、反発する者を抑えてまで王になりたい訳でもなかったので。
しかし――――……
「何が嫌なんだ？　ルクエールはイイ女だろ」
「俺の好みじゃない。大体愛人だぞッ！　愛人！」
「気楽でいいんじゃないか」
「いい事あるかァ！　お前は言われりゃ頷くのかッ！？」
「頷かねェな。女の機嫌取んなァめんどい。勝手に乗るなら構わねぇ……いややっぱ嫌だな。ダルいし」
「どんだけヤル気無いんだ貴様……」
　食べ終わったスナック菓子の袋を潰してポイとゴミ箱に投げ捨てると、のそりとラーは起き上がる。
「で、どうするんだ？　逃げる手伝いでもして欲しいのか？　しねえけど」
「たわけ。ここまでコケにされて引き下がれるか。俺がルクエール

から王位継承権を奪ってやるのだ」
「――へぇ？」
すいと目が細められ、初めてラーは感情を微かにではあるが動かした。楽しそうな笑みがその唇に浮かんでいる。
「お前が？　本気で？」
「当然だ！」
「それを言いに来たのか？」
「そうだ。どうする？」
いかにヤル気の無いラーとは言え、やはりハーフの自分が王位を継ぐのは気にくわないかもしれない。
（それならそれで構わん。それでも俺の意思は変わらんからな！）
これからを思うと少し鈍い痛みを覚えるが、どうせ避けて通れない道。ここではっきりさせておきたい。
「言ってるだろ、面倒くさい。とにかくどうでもいいから俺を巻き込むな」
「関わらんならそれでいい」
「……本気で一人でやる気か？」
「勿論だ」
ソウルにも勿論お付きの部下は何人もいる。しかし王位を狙うとなると信用できたものじゃない。
「出来りゃ面白いとは思うけどな。一応言っといてやる、止めとけ。お前を良く思わない奴は多い」

「知っているとも」
　人間とのハーフであるソウルが王子として何不自由なく暮らせているのは、王がソウルを息子として認めているのと、ソウル自身の才。そして何より――害にならなかったからだ。
「だからどうした。別に誰に気を使っていた訳でもない。俺に必要ならば奪い取るまでだ！」
「ふうん。ま、頑張れ」
「……」
「どうした？　用は済んだろ。俺は寝る」
「眠れば良いだろうが」
「……」
　別にソウルが居て眠るのに邪魔という事は無い。というかラーに他人を気にするような可愛い神経は無い。だが。

「……怖いのか」
「なっ、何をっ！」
「ソウル！」

　ばん、と遠慮も何も無くラーの部屋の扉が開かれルクエールが入ってきた。瞬間ソウルは明らかに『げっ』という顔をして身を引き、ラーは変わらぬ抑揚のない眼で扉の方を見た。

「やっぱりここだったわね」
「つーかお前！　ここはラーの部屋だぞ！」
「それが何？　今王の次の地位にあるのはこの私よ」
「ぐっ……」

今までは王の次に地位が高かったのは、第二妃とはいえ本来ならば王妃に相応しい地位を持つシュツィルオーレを母に持つラーだった。
今までずっとラーは血筋と能力の高さから次期魔王と期待されていたが、あまりのやる気の無さについに元老院も諦めルクエールで妥協したのだ。
前々からソウルはルクエールにちょっかいをかけられる度、よくよくラーの部屋を利用していた。勿論ルクエールもそれは知っている。だが王の姪とはいえ直系第一子のラーの部屋まで踏み込む事は出来なかったのだ。
ルクエールは既にラーから王位継承権を奪い取る事を決めていたので、下手にラーの不興を買って邪魔をされては困る。そうしたら自分が不利――というよりも絶対的に無理なのはよく判っていたので。もっともラー本人はルクエールが入って来た所で気にしなかっただろうし、それが判っているからルクエールもこうして今は踏み込む心積もりが出来た訳だが。

「な、何の用だ」
「何の用も何も、お前は私のものなんだから私の側が定位置なのよ」
「勝手に決めんな！」

くすくすと綺麗な顔で微笑まれてもソウルの肌には鳥肌しかたたない。美人かどうかはこの際関係無い。自分の意思の介在しない物事がとかくソウルは嫌いなのだ。

「ふ、ふん！　まあ丁度良かった！　ルクエール、貴様に言っておく事がある！」
「あら、何？」
「貴様の愛人など真っ平ごめんだ！　貴様の持つ王位継承権、この俺様が奪ってやるから覚悟しておけ！」

ソウルのセリフを聞き終えた後、きょとんとルクエールは静止して、それから弾かれたように笑い出した。
「お前が？　王位を？　ふふふっ、中々面白い冗談だわ」
「誰が冗談など言っとるか！」
「――本気なの？」
小馬鹿にしたように笑い続けていたルクエールが、ピタリと笑いを止めてソウルを見据える。覚悟を決めて王位を奪った女傑の眼で。
「無論本気だ！」
「諦めの悪い子ね。まぁいいわ。お前のそういう所も結構好きよ。従順なだけじゃつまらないものね？」
ペロリと唇を舐めてルクエールは毒々しく笑う。
「陛下の血を継いでいるとはいえ半端なお前がどうやってジジィどもに納得させるのか……楽しみにしているわ」
「ふん！　その余裕にスカしたツラ、すぐに吠え面に変えてやるわ！！」
腕を組み、自信たっぷりに言い放つ。何も考えちゃいなかったが人生ハッタリも必要である。
「まぁそれはそれとして――」
「っ？」
毒々しい笑いを引っ込めて、今度は熱の入った視線をルクエールはソウルへと向けた。

「お前が私から継承権を奪うまではやはり私の方が立場は上なのだから、大人しく相手をなさい、ソウル！」

1―2

ヴッ！

魔力で生み出した槍を手に構え、ルクエールは床を蹴る。

「ごめんだ馬鹿者ッ！」

対抗するべくソウルも大剣を創り出し自分に突き出された槍を打ち払うと、早自分に関係は無いと寝転がって傍観しているラーの上を飛び越え間合いを取る。
大人しく武術の技量だけで戦っていれば問題は無かった。しかし間合いを取ったソウルが呪文を唱え、その集中した魔力の大きさに流石にぎょっとしてラーは体を起こす。

「おい！　ソウルお前――！」
「アグニス・フレア！」

火炎系最強呪文を躊躇いなくソウルは発動させる。他人の室内で。

「いいわ……ッ。お前の魔力、ゾクゾクするのよ……っ」

瞳孔を見開き嬉々とした表情で、ルクエールも部屋を埋め尽くす火炎へ向けて手を翳す。

「ラキュラス・クール！」

互いに相殺され、ソウル側には焼け焦げ、ルクエール側には氷結の跡を残してその膨大な魔力は消失した。

「ふん！　貴様を殺せば王位がどーのとか面倒な事をする必要もない訳だしな！　今ここでケリつけてくれるわ！」
「いらっしゃいな！　お前が負けたらお前は私のモノよ！」
「ほざけ！」

互いに再び床を蹴り肉薄し――

「ってか俺の部屋は止めろ」

白熱した二人の間に怒りに酷く冷めた声でラーが割り込んだ。ばさりと背から鳥類の翼を出し羽根二本を引き抜いて、ソウルとルクエールの足元に突き刺す。

「うっ！」
「きゃっ！」

ばち、と羽根が発した雷に弾かれ二人はそれぞれたたらを踏んで後退する。

「俺を巻き込むなっつってんだろ。余所で戦れ」

ほぼ全ての事に対し無気力なラーではあるが、否応なしに自分が巻き込まれる事態は嫌いである。ましてそれが安息の場である自分の部屋ならば尚更だ。
パリパリと発現した魔力が雷となってラーの髪をうねらせる。おそらく本人にしてみれば怒りと共にほんの少し表に現れただけの、意識もしていない程度の量の魔力。
――だがそれにすら、ソウルとルクエールの肌には鳥肌が立って自然体が逃げようと後ずさる。

『う……っ』

息を飲んで、空気が張り詰め、動けずに固まったままただラーの姿だけから目が離せない。
ふう、と息を吐いたただそれだけの仕草に、びくっ、とソウルとルクエールは揃って肩を跳ねあげ思わず互いの手を握り締めた。

「俺は外で一眠りしてくる。――戻るまでにきっちり直せよ」
『ハイ……』

魔力の発現が収まってふわりとラーの髪が自然のままに背に流れ、ほっと二人は肩から力を抜き――互いの手を握り合ったままなのを、一歩早くソウルが気が付き手を離して飛びのいた。

「あん」
「気色悪い声を上げてる場合か！」
「……そうね」

いつ気紛れにラーが戻って来るか判らない。戻ってきた時にまだ直し切れていなかったら――ぞっとする。
ぶるりと身震いをして、二人は共に休戦をしてラーの部屋の片付けを始める事にした。

「全く、酷い目にあったぞ」

時間遡行の魔術を行使し何とかラーの部屋を元通りにし、やれやれとソウルは第一庭で座り込んで一休みしていた。

流石にルクエールの方でも気力、魔力ともに使いきったらしく、再戦とはならずにそのままどこかへと消えて行った。おそらく部屋で休んでるのだろうが、正確な行き先など知った事ではない。かち合いさえしなければ。

だがその心配もさしてしていない。実は第一庭であり一番広い敷地を確保しているこの庭には、魔王とソウル以外の者は来たりしない。

ここは生前、ソウルの母が作っていた庭だからだ。

ソウルに母の記憶は殆どない。自我が確立する前に人の寿命は尽きてしまう。

(別に覚えておらん相手の事などどうでもいいがな)

――母が人間だったせいで、今自分はこんな面倒な立場に置かれているのだし。

ここに来るのも煩わしい他人がここには入ってこないから。――それだけだ。

「――?」

何となく面白くない気分でふてくされていると、ソウルの視界にひらりと翻ったレースの袖が見えた。

見間違いではない。

(この俺が気配を感じ取れんとは)

視覚で捉えなければおそらく気が付かなかった。判っている今も相手の気配を感じ取れない。

(面白い)

それ程の手練れがこの魔王城に侵入してくる目的と、何よりその人物自身に興味が湧いた。
今の今までソウルは気配を隠していなかったから、向こうはソウルの存在に当然気が付いているだろう。今から気配を殺して追うのは怪し過ぎるし、かといってただ追いかければ逃げられるおそれがある。

(向かってくりゃ問題ないんだがな)

しかしそうしてくれるかどうか判らない以上、それも上手くない。

(つー事は、やっぱアレだな)

す、と座っていたベンチから立ち上がり――ソウルは思い切り地面を蹴り、走った。

「動くなッ！」

びりびりと空気の震える大声で怒鳴ると、『きゃっ』とかこうまで綺麗に気配を消せる使い手にしては間抜けな悲鳴らしきものが上がった。
大体の方向は合っていたが、声を出してくれたおかげでよりはっきりと判った。ニヤリとソウルは口元に凶悪な笑みを浮かべ、追い付いた声の主へと手を伸ばす。

「何者だ！」
「きゃあっ！」

力の限りソウルが捕まえた腕は、柔らかくて細かった。

「お――……女っ？」
逃がさない様かなりの力を入れてしまっていたから、慌ててソウルは手を離す。
「はぅ。びっくりしたぁ」
ソウルに掴まれていた腕の部分をさすりながら、女――というよりも十五、六程度の少女だ――はほっと息をつく。
「何だ貴様は。人間だな？」
何だか拍子抜けして、投げやりにソウルは少女に訊ねた。
ソウルは人の気配を探る時、魔力で探査する。いや、ソウルだけではなく魔族の大方はそうだ。魔力のない魔族はいないので方法として間違ってはいない。
その方法で気配を感じなかったのは何の事はない、相手の魔力が最早無いと言っていい程に乏しかったからだ。
人間と比べはるかに強い魔力を持つ魔族にとって、人間などそもそも取るに足りない生き物である。はや興味は半ば以上失せていた。
「うん、そう。マナっていうの。君は？」
腕を掴まれた瞬間は本当に驚いていたようだが、ソウルの容姿に腰を屈め、目線を合わせてにこやかに話しかけて来た。
――明らかに、自分よりも幼い者に向けての話し方で。
「たわけ！　俺様は千二百六十六歳だ！　貴様等と同じ物差しで測るでないわ！」
「えぇっ！」

驚きの表情で仰け反ったマナにふんと鼻で笑ってソウルは溜飲を下げた。

「まぁ無知な輩という事で今回は許してやろう。俺様はソールスティーリッヒ・バル＝アク・ハインシュベルク。この国の王の第二子であるぞ！」

「王の……って、王子なんだ？」

「その通りだ」

腕を組み、ソウルは相手の視線を感じながら鷹揚に頷く。悪くない気分で。

「本当に？」

「見れば判るであろうが！」

「いや見ただけじゃ判んないけど」

「む……っ。この俺様の高貴さを解さんとは……。無知なだけでなく感性までも曇っているようだな」

「どっから来るの、その自信……」

自分を貶める言われようだが、ソウルの言い方があんまりなので怒りよりも呆れの方にマナの心は占められた。

「じゃあ、本当に、本当に王族？」

「だからそうだと言っておろうが！」

「じゃあ——私と契約して！」

がっ、と勢い良くソウルの手を握り、マナは色々あるべき段階を吹っ飛ばしてそう言った。

1—3

「は——ァ？」

唖然としてソウルは口をぽかんと開けたまま固まって——すぐにかっと怒りに頬を染めてマナの手を振り払った。

「ふ——ふざけるなッ！　俺はこの国の王族だぞ！　それを、それを——！」

軽々しく扱われた——。

それはソウルが見ないようにしているコンプレックスをまともに刺激してくれた。

「貴様のようなロクに魔力も持たん小娘が契約しろだと！　ふざけるなッ！」

「——っ」

びくとマナは身を震わせ、拳を硬く握って耐えるように唇を噛んだ。その表情はすぐにでも泣きだしてしまいそうで。

「お、おい？」

自分は悪くない。悪くないと思うのに、何故か悪い事をした気分になる。

「判ってるわよ……っ」

「っ？」

顔を上げてきっとソウルを睨んだマナの眼には、やはり僅かに涙が滲んでいた。しかしそれでも泣くまいとする意思が叫ぶ事で思いを散らそうとする。

「だから強い魔力を持った相手と契約しなきゃいけないのよ……ッ！」

「まさか、その為に魔界に侵入したのか？　自分の眼で見定める為に？」

「それもあるけど、私の魔力じゃ喚べる相手が限られるのよ。だから直接交渉しに来たの」

「ご苦労な事だ」

原則、魔界は人間を受け入れない。マナが落ち着いたのにほっとしつつ、しかしソウルは冷たく突き放すセリフを吐いた。その熱意は買ってもいいが、だからと言って契約してやるつもりなど更々ない。

「駄目なの？」

「駄目だ」

「そこをなんとかっ！」

「くどい！」

どんなに言われようと御免である。何より。

「強ければ誰でもいいという態度が気に食わん！」

「うっ……」

尤もと言えば尤もなソウルの怒り。反論できずにマナは言葉に詰まった。

「さっさと帰れ。己に釣り合わん相手と契約する物好きなどいるものか」
「待って！」
「ぐぅえッ」

立ち去ろうとしたソウルの襟首を掴み引き止める。焦っているのか思い切り引っ張られたので本気で息が詰まった。魔力で肉体強化していない時の体の強度は、魔族であっても実は人間とそう変わらない。
本気の悲鳴にマナの方も慌てて手を離し、ソウルは地面に手を吐いてゲホゴホと咽た。

「なっ、何をするか貴様ァ！」
「ご、ごめん。焦ってたの。つい」
「ついで首を絞めるな可愛気のない！　袖とか裾とか、色々あるだろーが！」
「……君、乙女だね……？」

女性に求める挙動が、ソウルの方が余程乙女だ。マナの言葉にがんっ、と明らかにショックを受けた顔でソウルは仰け反った。
「な、なっ、何をッ！　女に女らしさを求めて何が悪いか！　俺はなぁっ、図々しい女は嫌いなのだッ！！」

ソウルの理想像は何年にもおけるルクエールのトラウマからともいえる。
「私もそれはそーだと思うけどそこまでわざとらしいのは要らないなー。ってか、出来ない。ソレ出来るの計算づくの子だと思うよ。むしろ可愛くないと思った方が良い」
「ううぅっ、うるさぃッ！」

聞きたくないとばかりに言葉に噛みつくソウルにマナは肩を竦めて反論しなかった。
そのマナの態度は腹が立つ。腹は立つが――これ以上この論争をしたくなかった。

「と、とにかく！　貴様と話す事など何もない！　さっさと帰れ！」
「契約するまで帰らないって決めて来たの！」
「だったら勝手にしろ！」
「だから契約して！」

振り払おうとするソウルの腕をしっかと掴み、ずるずる引き摺られながらもマナは手を離さなかった。

「他の奴を見繕えば良かろうが！　俺様程でなくともそれなりの魔力の持ち主ならゴロゴロしておるわ！」
「君が良い！」
「誰でもいいんだろうが！」
「誰でもいいけど君が良い！」

マナとて魔界に来る事に恐怖がなかった訳ではない。初めての遭遇であるソウルがそう話せない相手でもなかったのに、正直ほっとした。

「訳が判らんぞ貴様ッ！」

遠慮なくズルズルと引っ張っているのに、マナの手は離れない。中々の握力だ。

「――お前、何かやってるのか？」

いっそ感心してしまって、溜め息をついて立ち止まるとソウルはそうマナに訊ねた。
「うん。武術は一通り」
「ふぅん？」
少しばかり興味を持ってソウルはマナの肩を、腰を、足に触れ。
「何してんだァッ！」

ゴッ！

「っだァッ！」
当然と言えば当然だが、思いっきりマナに殴られた。
「何っ？　子供な容姿しててアンタ痴漢ッ？」
「誰が痴漢だァッ！　つーか俺様は子供ではないゆうとろーがっ！」
「だったら確実に痴漢でしょーが！　勝手に腰やら足やら撫で回してきたら何を言おうと痴漢よ！」
マナが正しい。ソウルがマナの体を触ったのに性的な意味は無かったが、言われて気が付きぶんぶんと首を思い切り左右に振る。
「違っ、違うぞ！　単に体つきを見ただけだっ」
「紛う事なく変態のセリフよ！」

言い方が悪い。よりマナの軽蔑の視線は痛くなった。
「だから違うと言っとろーが！　どの程度鍛えているのかを見ただけだっ！」
「あのねえ！」
そんな言い訳——と更に怒鳴ってやろうとしたが、しかし目の前のソウルはどうやら本気らしかった。
「それでも許可なく触りゃ殺されたって文句言えないわよ」
「殺っ……」
「当っ然でしょ」
そこまでかっ？　と顔を引きつらせるソウルにマナはきっぱりと断言した。
「あんただって知らない奴に尻やら腰やら撫で回されたら嫌でしょうが」
「うっ……」
今まさにルクエールから己の意思と無関係に愛人にされそうになっているソウルとしても反論できなかった。
「で？」
「……で、って何だ」
「自分が悪い事をしたって自覚はあるのよね？」
にっこり、と笑ったマナの顔にうっと呻いてソウルは後ずさる。マナが何を求めているかは判る、判るが——
「おっ、俺様は謝らんぞ！　ハインシュベルクの王子たるこの俺が

人間ごときに謝ってたまるか！」

「じゃ、謝んなくていいから契約して」

「なっ！　けっ、結局そこに戻るのかっ！」

「だってそれが目的だもの！」

マナの言葉にソウルはくらりと目眩がした気がした。こんな事になるならいっそ痴漢で通した方が良かったか――いや駄目だ。やはりそんなのは耐えられない。

1—4

「わ、判った。じゃあ俺より強い奴を紹介してやる。それでいいだろ。後はそいつをお前が口説き落とせばいいのだから変わらんし」
「やだ」
「何でだっ!?」
もうラーに押し付けてしまえ、とか思っていたのにきっぱりマナは拒否して来た。

「ロクでもないの紹介して厄介払いする気でしょ」
「自分でも厄介だという自覚はあるんだな——ではなくて! ロクでもないのとは何だ! ラフィリアークディル・レヴァデア・ハインシュベルク。俺の兄だ」
「……兄弟の上だからって優秀とは限んないわ」

目を伏せ、ぽつんと呟いたマナの言葉は痛い心に満ちていた。

「何だ、お前、妹だか弟だかに負けてるのか」
「はっきり言うなぁ」
いっそ清々しいソウルの直接的な言い様にマナは苦笑して——頷いた。

「うん、そう。私の家ではね、魔力が強いのが当たり前なの。そーゆー家系なんだ。でも判るんでしょ? 私、ほとんど魔力なんか持ってないんだ」
「成程な。自分に無い力を契約した奴で補おうという訳か。他人任せにも程がある。ヘドが出るわ」

マナの言葉に毛ほども同情せずにソウルはそう吐き捨てる。一瞬マナは怯んだ表情をしたが、すぐにきっと眉を吊り上げソウルを睨んだ。

「仕方ないじゃない！　無い物は無いんだもの！　自分に自信たっぷりな貴方とは違うのよッ！」

「……っ」

マナの言葉にかっとソウルの頭は熱くなる。

(俺が。俺が——何もしないでここまで来たとでも？)

半端な生まれであるソウルは、王の血を引いているとはいえ常に周囲から蔑みの目を向けられてきた。庇ってくれる者など勿論いなかった。父である王も、母を愛してはいてもソウルに心は向けなかった。

自分を王家の汚点として、殺されそうになった事だって覚えていられる数じゃない。

その周囲の態度に、怯えが無かったとでも？

(ふざけるな！)

その周囲の者達に反発する様にソウルは生きて来た。

だからどうしたと。誰に遠慮もしない。自分を卑下する事もしない。ただ強く、強くと、自分を守る為にこうして来た。

「俺は他人任せに楽をする奴など大っ嫌いだ！　魔力が強い家系？　それがどうした。魔力なんぞ無くてもどうとでもなるわ！！　ならないならどうとでもするのだ！！　それだけに価値を置くから何

も見えんのだ、馬鹿者め！！」
「仕方ないじゃない！！　価値なんか無いのよ！！　魔力が無くちゃ……何にもない……。皆がそう見るなら、仕方ないじゃない！」
「『皆』などそれこそどうでもいいであろうが！！　他の誰が何を言おうが、お前がお前の価値を信じればいいだけだっ！」
「──……っ」
はっとしてマナは目を見開いた。ソウルの怒り方はただ気に食わないからという相手に向けるものではない事に、気が付いたから。

「……ごめん」

マナとて、その努力を惜しんできたつもりはない。魔力が無い代わりにと磨いた武技は、国の中では五指の指に入る程。
いつか、それをして自分を認めてくれるのではないかと──思っていた。
だが、駄目なのだ。
マナの家系で尊ばれるのは魔力だけで、他の何を持っていても駄目なのだ。

「……いや」

マナの謝罪に少々ソウルも気が咎めた。マナが本当に何もしていないなどと思った訳ではない。事実彼女は歴戦の魔術師ですら恐れて忌避するこの魔界へ、魔力をロクに持たない人の身で来たのだから。
ただ、弱かった自分を思い出してマナにぶつけてしまっただけだ。
「ソールスティーリッヒ、だったよね」
「……あぁ」

「やっぱり私、貴方がいい。私と契約、してくれない？」
「……俺は」
マナに力を貸すのも、悪くはないかもしれない。ふとソウルはそう思った。
しかしそうなると今度は別の躊躇いが出来る。
(俺は、半端だ)
何を言おうと、どれだけ力があろうと――それは事実。
(俺と契約して、こいつの目的は果たされるのか？　より蔑まれるだけではないのか？)
「ねえ、ソール――……」
「ソウル！」
マナの再度の呼び掛けを遮る形で凛とした女の声が第一庭に響いて、あまり嬉しくないその声に慌ててソウルは声のした方を振り向いた。
「ル、ルクエール……ッ！？」
何故ここに、とソウルの表情がそのまま言っていた。王家に人間の血を混じらせたソウルの母をはっきり毛嫌いしているルクエールが訪れるはずの無い場所だというのに。
(とゆーかこいつ何でわざわざ俺を捜しに)
時間遡行の魔術で同じくらい消耗していたはずだというのに。まさかルクエールとの魔力にそんな開きがあってもう再戦しようとか

——イヤイヤ、そんなはずはない。

「ソウル、陛下が——……って待ちなさい。何、その女」

何処か慌てていたような様子はあっという間に消え去り、ルクエールはソウルの後ろに隠れていた、とは言ってもマナの方が背が高いので隠れきれてはいなかった彼女を見つけて、きっと睨み付けるとつかつかとそちらに歩み寄る。

「お前、人間ね」

「……そうよ」

ルクエールの露骨な嫌悪と侮蔑は、ストレートにマナへと伝わった。隠そうとしていないのだから当然だが。

マナの答えが終わるかどうかのうちに、ルクエールの手に短刀が生まれ無表情にそれを首を狙って突き付け——

ギン！

マナの首を裂く手前で、手の平に薄く張ったソウルの魔力に叩き折られた。

「何のつもり、ソウル」

「目の前で殺させるのが気に食わん程度には、俺がこいつを気に入っただけだ」

「ソール……」

庇われた安堵と、何よりソウルの『気に入った』という発言に嬉

しそうにマナの表情は輝き、逆にルクエールの表情は怒りに歪む。

「私よりも人間の小娘を取るというの」

「当たり前だろーが！　貴様選ぶよりゃなんぼもマシだ！」

「……ふ……」

「ふ？」

「ふふ……ッ。ふふふふふふ……っ」

1―5

絶句し、しばし沈黙したかと思えばルクエールは低く暗い声で笑い始めた。ソウルは全く気が付かなかったが、マナは確かにルクエールの声に傷付いた響きを感じ取ってはっとした表情になる。

「自分が誰のものなのか、しっかり調教してあげるわ！！」

「ふざけんな！　俺は俺のもの以外の何者でもないわ！！」

叫び、魔力を集中させ始めたルクエールに備えてソウルも構えようとして。

（うっ）

元々魔術を使える程の魔力はもう残っておらず、それはルクエールも同じようでそこはほっとしていたのだが、更にソウルの方には武器を生成する魔力すら絞り出せそうになかった。

「ふっ！　どうやらまだ武器も作りだせないようね！」

「くっ」

（マズい、いくら何でも素手では――）

焦るソウルに構わずルクエールは地面を蹴る。むしろ絶好の好機と言える。

「ちっ！」

舌打ちをしてマナの手を取るとソウルはその場から逃げだした。

「逃げ切れるの？」
「知るか！」
「あの人の武器、何か特別だったりする？」
ソウルに手を引かれて走りながら、マナは後ろのルクエールを見ながらそう聞いて来た。
「アレはただ魔力が武器の形をしているだけだ。間接攻撃をして来んところを見るにどーやらあいつもそう余裕はなさそうだがな！」
「成程」
頷き、マナはぱっとソウルの手を振りほどく。ぎょっとして慌てて止まろうとして、体がつんのめったが、しかし何とか倒れるのは耐えて振り返る。
「おい、マナっ！？」
「ただの武器なら大丈夫」
すいと足に手をやって、スカートの内側から忍ばせていた剣を取り出す。流石にやや短めだが、短刀という程短くはない。
「どけ！　人間！」
ソウルに対する時とは違う、本気でマナを殺す力を込めルクエールは槍を振り下ろす。
「ふっ！」
短く鋭い呼吸と共にマナはルクエールの槍を絶妙のタイミングで跳ね上げ、無防備になった懐に飛び込み足を掬って倒し、その上に

乗って首元に刃を当てて動きを封じた。
「くっ……」
「全然甘いわ。ちゃんと武術修めてるの？」
マナの剣は『技術』である。普段ルクエールは――というかソウルもだが、力任せに叩っ斬る、のが普通なのである。強大な力を持つ魔族故の戦い方だ。
「ちょっと寝ててね」
「うっ！」
鳩尾に拳を叩き込み、びくんとルクエールが痙攣して体から力が抜けたのを確認するとマナは馬乗りになっていたルクエールの上から立ち上がった。
「行こ」
「ってどこにだ」
マナに手を引かれうっかり歩き出してしまってから、手を振り払って隣に並びながらそう訊ねる。
「とりあえず彼女が起きる前にここから離れた方がいいでしょ？お父さんの所がいいんじゃないの？」
「親父の？　何で」
ルクエールから離れるのは大賛成だが、父王の所に行くのは微妙に気が進まない。
「だってさっきの人、『陛下が』って言い掛けてたよ？」

そう、マナを見付けて目的がすり変わってしまったが、ルクエールは何やらソウルに用があったのだ。
「……親父か……」
「仲、あんまり良くないの？」
少々苦いソウルの声にマナはそう気遣わしげに訊ねて来た。
「良くはないな」
「そう」
「しかし行かん訳にもいくまい。俺が正当に王位継承権を取るまで親父に何かあったら困るしな」
「王位？」
ソウルが第二王子である事はマナも聞いた。順当に考えて兄だというラーが第一王位継承者なのだろうと判断する。訂正するのも説明するのも面倒なので特にソウルも何も言わない。
「ソールは王になりたいの？」
「……オイ、何でお前がソールとか呼んでんだ」
「さっきの人も呼んでたから。だ、ダメ？」
仲の悪そうなルクエールが許される呼び方だから、意外とフランクにオーケーだろうと思ったのだが、自信無さ気にマナはソウルの様子を窺った。
確かにソールスティーリッヒという本名は長い。嫌いではないが。それを呼ぶ者はかなり少ない。
「まあ、いいが。ソールではなくソウルと呼べよ」

「ソウル？」

強調された『ウ』の音にマナは首を捻った。

「だってソールスティーリッヒ、でしょ？」

「ソール（天空）よりソウル（魂）のがカッコ良いではないか！」

「……それだけ？」

脱力してそう確認したマナに何ら怯む事なくソウルは得意げに胸を張る。

「十分な理由であろう！」

「……そうだね……」

本人がそれが良いというなら良いのだろう。マナは同意して頷いた。

「でも律義にあの人も守ってたよねえ、ソウル」

「ルクエールか？」

「うん。もう少し優しくしてあげればいいのに。ソウルの事好きなんだよ」

「有り得んな」

下らん、と吐き捨ててソウルは取り着くシマも無くそっぽを向く。

「どうして」

「俺はあいつをガキの頃負かしてるんだ」

子供の頃、遊びがてらで賭け試合に参加した。魔族の中では珍しい事ではない。ちょっとした小遣い稼ぎにもなるし。

（半端の俺に負けたのが気に食わないんだろうさ）
　それがきっかけなのだろう、事あるごとにちょっかいを掛けられてきた。時と共に多少手緩くはなってきたが、初めの頃はそれこそ本気で殺されかけたのも一回二回じゃない。
（こうして生き残っているのは、ルクエールよりも俺様の方が強いからに他ならん）
「子供の頃でしょ？　……っていうか、ソウルは大人なの子供なの。魔族的に」
　年齢は聞いたが、魔族における千と二百歳そこそこというのはどれぐらいなのだろうか。
「……き、貴様よりはずっと年上だ」
「うん、良く判った」
　知識や知恵はどうか判らないが、精神的にはほぼ見た目通りで良さそうだ。
「何っか腹立つんだが貴様。……まあいい。俺はとりあえず親父の所に行って来る。お前を連れてはいかんから適当にどこにでも行け」
「て、適当にって」
　丸投げなソウルの言葉にマナはもう少し何か、と情けない表情になる。その顔を見てはぁ、と一つ溜め息をつき。
「まだ居座る気なら俺の部屋を貸してやる」
「うん！」

ぱっと顔を輝かせたマナにソウルは再び溜め息一つ。

「お前、仮にも男の部屋に……まぁ俺様は人間なんぞに興味はないがな」

明らかに男扱いされていないのが若干面白くないが、露骨に警戒されるのも本当にその気が無いので腹が立つ、という複雑な心境。

「付いて来い」

「うん」

真っ直ぐ自室のある第二邸へと戻った。二階丸々がソウルの部屋であり、この上の階にラーの部屋がある。自室の中の一つである客室にマナを通してからびしとソウルは彼女に指を突き付けた。

「いいか！　勝手にウロチョロしたり人の私物に触れるなよ！」

「判ってる判ってる。——あ、ねえ」

笑って手を振ってソウルを見送ろうとしてふと気が付いたように呼び止めた。

「何だ」

「ソウル、さっきの——……いや、やっぱり後でいいや。行ってらっしゃい」

「？　行って来る」

多少気にはなったが元々ソウルは細かい事には拘らない性質だ。マナを残して父の私室へと向かう。

「……私の事嫌ってないなら契約してくれないかなぁー……」

今言っても機嫌を損ね、部屋から追い出されると面倒なので言わなかった言葉を、見えなくなった相手に向けてぽつりとマナは呟いた。

第二章　襲撃開始

「遅かったな」
「煩い。ルクエールを迎えに来させる方が悪いのだ。それより――」
　魔王の私室に入ってすぐ、掛けられたラーの言葉に噛みついてからソウルは部屋の中へとぐるりと目を向ける。
「別に迎えになんかやっちゃない。ソウルも呼んどくか、って言ったら勝手に行っただけだ」
「……お前、実は俺の嫌がる事を楽しんでるだろ？」
　微かに笑ったラーの瞳に宿っているのは、あまり性質の良くない笑い。ソウルの言葉への肯定だ。
そして次に姿を見せたのは三十から四十の間ぐらいの、見るからに高価な衣装で自分を飾った女性だった。もっともその衣装に負けないだけの華やかさを彼女自身も持ち合わせていたが。
彼女は部屋に居るソウルを見るなり、はっきりと眉間にしわを寄せる。
「全く……ッ！　王の御前に姿を見せるとは何と図々しい！　半端なお前が誰の許しを得てこの場に立っているのです」
「俺が呼んだ。文句があるか？　母上」
　ソウルが何を言うよりも早く、常の彼にはあり得ない意図した冷ややかな声音で、ラーはそう己の母親に声を掛けた。
途端びく、と第二妃シュツィルオーレは体を震わせ何とか唇に笑みを作る。

「ラ、ラー……。い、いえ、母はそのような……。お前が望むなら、別に……」

ラーの態度も冷ややかだが、シュツィルオーレの態度も必要以上におどおどとおかしい。

――いつ見てもこの親子の関係には違和感を覚える。

「それで、親父が一体どうしたと？」

「襲撃されたらしいな」

別にこのぎすぎすした空気を楽しむような趣味はないので、さっさと二人の空気を割ってラーに話しかけると、いつもと同じ、抑揚の無い口調でそう答えた。それにシュツィルオーレがホッとしたのに気が付いたが――まあ、どうでもいい。

「どこの誰にだ。つーか無事なのか？」

「逃げられた」

この場の誰よりも一段太い大人の男の声が静かに現れそう言った。

「ラー、ソウル。……ルクエールはどうした？」

自分の息子二人、そして自分の後を継ぐであろう姪の姿を探すが、生憎今ここにはいない。

「陛下！　いかに陛下の姪とはいえルクエールは直系ではありません！　やはり陛下の後は直系第一子であるラーが継ぐべきではありませんか！　であればルクエールはこの場において部外者のはず。気にする必要もありますまい」

自分の妻であるシュツィルオーレにふむ、と目を向けてから――
静かに王はラーへと視線を移した。
「どうだ、ラー。継ぐ気はあるか」
「無い」
「と、言う事だ、シュツィルオーレ」
迷わずきっぱり即答したラーに怒るでもなく呆れるでもなく、王はシュツィルオーレにそう言った。
「ソウルに継がせる気は無い。なればやる気も才も、ルクエールが最も妥当だと思うがな」
「っ……」
王自らの断言に、ソウルは歯を噛みしめやや視線を落とした。――判っていた事だ。
「まあいい。それよりも本題に入ろう」
「わざわざ俺等を呼んだって事は親父個人を狙ったもんじゃないって事か？」
いやしくも魔王の座に就く男である。命を狙った襲撃の一つ二つで騒ぎたてはしない。
「さて――それは何とも判らんが。報復をするべきかどうか迷っている」
「すりゃいいだろうが」
「同族相手なら迷わんのだが、どうにも相手は人間でな」
「人間？　それはまた大それた事を」

ふんとソウルは鼻で笑った。確かに一時期、領地争いで魔族と人間の関係は最悪だった。しかし魔族が地下世界を自らの魔力で開拓して、こちらに住むようになってからは関係という関係はほぼなくなっている。

稀に人間の優れた魔術師達が強大な魔力を求めて契約を欲するが、その程度。

魔族にとって肉体も脆く魔力もさして持たない人間など本気で相手にする事も無い存在――

「しかし妙な話だ。人間が何故魔王を襲う」

領地争いをしていた頃は、それこそ人間の英雄が『勇者』と称えられ乗り込んで来たものだが、今ではあまりそういう事も無い。――まあ、未だ『存在そのものが悪』と突っかかって来る者がいないとは言わないが。

だがあくまでそれは特例。やや不審そうに呟いたラーにソウルも頷く。

「そもそも人間の侵入を見逃すとも思えんのにこの王城にまで入られているのが納得いかんな」

マナの様に魔力が無いような人間ならまだしも、その手の輩は大抵強い魔力を持っているか、少なくとも人間にしては優れていると言っていい魔術師を連れている。

「そう。だから迷っているのだ」

「だが結局逃がしたんだろ？」

報復も何も相手が居ない、とラーは肩を竦めたが逆に王に笑われた。

「血の一滴、髪の一本もあれば十分だ。そうだろう、ラー」
「ふん」
　本人の肉体の一部があれば、その波長を辿って本人まで辿り着く事が出来る。勿論距離と時間と探す者の力量に効果は大きく左右されるが。
「それを踏まえて――どう思う」
「面倒い。放っておけばいい」
　王の再度の質問に真っ先に答えたのはラーだった。その内容にやる気がないが。
　勿論返ってくる答えは判っていただろう、苦笑して王は頷きソウルへと続けて目を向ける。
「どうだ、ソウル」
「俺は気に食わんな！　企んでいるのが何にせよ相応の報復はしてやるべきだ！」
　水を向けられソウルは勢い良く言い切った。ソウルの性格上、売られたケンカはスルーしない。
「ふむ。シュツィルオーレ、お前は」
「人間如き、わざわざ騒ぎ立てる事もありますまい。己が格を下げるだけです」
「二対一だな」
「……」
　少しだが、意外な気がした。シュツィルオーレの性格ならば、人

間如きに舐められてたまるかと報復を訴えるかと思ったが――

（どうせ俺が報復を求めたからだろ）

自分から正妃の地位を奪ったソウルの母を、そしてその子供であるソウルを嫌って――いや、憎んでいるから。

母が死んだ後も正妃の座は戻ってこなかった。その事がまたシュツィルオーレのプライドに障るのだろう。

「私は報復を行うべきだと思います、陛下。少なくとも放っておくべきではない。仮にも陛下の元まで侵入して来たのですから」

シュツィルオーレの言葉に王が頷いたその直後、扉を開けて入って来ると同時にルクエールはそう言った。

「ルクエール！」

もう気が付いたのかと、流石に少々バツが悪そうにソウルがその名を呼ぶと、ちらりと目をやり小さく呟く。

「後で覚えてらっしゃい」

当然ながら怒りの全く冷めていない眼でじろりとソウルを睨むと、すぐにルクエールは王へと目を戻した。

「これで二対二か」
「陛下のご意思は？」

おそらく奇数でケリが付けばそれで決定するつもりだったのだろう。しかし生憎ここにいる人数は偶数で、そして意見も綺麗に割れ

た。
最終意志決定者としてルクエールに仰がれると、ニィと凶悪に笑って王は断言した。
「では、正当なる報復を。——狙いが俺ならばその血に連なるお前達にも何か仕掛けてくるかもしれん。気をつけよ」
「ふん。人間如きに後れは取らんわ！」

血の中にその人間が宿るお前が何を——とシュツィルオーレの眼が言っていたが、無視をした。

「話は終わりだな。俺は戻る」
「なら俺も戻るかな」
(……マナの事も気に掛かるしな)

ラーに続いて広間から出た所で、ぐいと腕をルクエールに引かれて引き止められた。

「何だ。またやる気か？」

正直今日はもう勘弁してもらいたいが、勿論挑まれれば受けて立つつもりで、弱気を隠してソウルは自信ありげに笑みを作って言った。

2—2

「それでもいいけれどその前に、一言ぐらい何もないのかしら」
「謝らんぞ」
「……お前は本当に可愛くないわね」
「結構だ」

ルクエールから腕を取り戻しふいと踵を返すと、その横にルクエールも並んで歩き出す。

「…………何だ。まだ何か用があるのか」
「あの娘はどうしたの」
「貴様の知った事ではあるまい」
「なくなどないわ。お前は私のものなのよ。——大体、人間などを相手にして周りに何を言われるか考えないの？」

マナを庇い部屋にまで招いた事を知られれば——言われるだろう、間違いなく。
それが煩わしくないとは言わない。だが。

「それがどうした。俺様がマナを気に入った。俺のしたい事をするのに誰に阿(おもね)る事も無いわ」
「……ソウル」
（お前は本当に——強いのね）

それが発揮されているのが人間の小娘に、というのが気に食わないが、それでもやはりソウルのこの強さが、好きだ。

（……私には出来ない）

それが出来るのなら、ソウルを夫にと素直に望むだろう。しかし怖くてルクエールにそれは出来ない。ハーフであるソウルへの反発を負うのが怖いのだ。
　ソウルとの出会いは最悪だった。ソウルにとってもそうだろうが、ルクエールにとっても。
それまで同世代ではラーにしか負けた事など無かったのに（アレは別格なので戦えるとも思えない）、更に自分よりも年若いソウルに負けたというのが。人間の血を引いた恥さらしなど見たくもなかったからそれまでルクエールはソウルの顔を知らなかった。
悔しかったし腹立たしかった。半端なくせにそんな才を受け継いで生まれて来たソウルも、そんな半端に負けた自分も。
――殺してやろうと、本気で思った。喜ぶ者こそ居れ、悲しむ者など居るはずもない。

（そう思っていたのにね）

そしてそう思っていたのはルクエールだけではなくて、中にはルクエールが眉をひそめるような手段を取る者もいた。
だがそのどれにも、ソウルは屈しなかった。
それを生意気だ、と思わなくなったのはいつからだろうか。

「……」

無言になったルクエールにちらちらと視線を向けながらソウルはどうしたものかと困っていた。

（どこまで付いて来る気だ）

部屋まで来る気ならこのままではまずい。マナを見られたらまた

煩いに決まっている。
丁度注意は逸れているようなのでどこかに逸れてやり過ごすか――と足を止めると、考え事をしているというのにルクエールはすぐに気が付いた。

「どうしたの？」
「そりゃ俺のセリフだ」

嫌だったが、波風立てるのを承知でそうソウルは口火を切る。このまま延々隣で歩き続けるよりはマシだ。

「何で貴様と並んで歩かにゃならんのだ」
「だから言ってるでしょう？　お前は私のものなのよ」
「ふざけんなっ！　いい加減に――っ！」

怒鳴りつけようと声を荒げ、不意にルクエールの背後を取った人影にはっと眼を見開く。

「ソウ」
「伏せろ！」

呼び掛けを遮りソウルはルクエールの体を押し倒す。そのルクエールの頭の上を魔力の塊が通り過ぎて事態を悟り、すぐさまルクエールは槍を創り出し当たりの気配を探り――

「無駄だ。逃げやがった」
「……そのようね」

更に慎重に辺りの魔力を探ってから、しかし反応は感じられずルクエールは頷いた。

「人間だったか？」

見てはいないが、つい先程魔王から忠告された事もあってソウルはもしかしたら同じ奴かもしれないと、その可能性をルクエールに訊ねる。

「判らないわね。――お前は怪我していない？」

「する訳無かろうが」

立ち上がり、つい先程そこに人影が居た場所を睨みソウルは笑う。

(面白い。何者か知らんが戦りがいありそうではないか)

今度もマナと同じく全く気配を悟らせずにここまできた相手だが、明らかにマナとは違う。確実に優れた魔力を持った強力な魔術師だ。城の結界に反応しなかったという事は結界師達よりも上の実力を持っているという事になる。

この目で見るまでは信じられなかったが、それが事実だ。

「……ソウル」

「？」

元々ソウルは好戦的だ。遠慮なく戦えそうな相手の実力に期待して少し楽しくなっていた所に声を掛けられ我に返った。

「庇ってくれるのね」

「はぁ？」

「庇ったんでしょう？　さっきのは」

――確かに庇った。咄嗟だったのでつい、というのもあるが。

「それが何だ。人間如きに魔族が手傷を負わされるなど面白くないからな」

「……そう、有難う」

少々複雑そうに、しかし確かに笑みを浮かべてルクエールはそう言った。

「では次はお前を守ってやらないとね」

「いらんわ！」

「照れる事は無いでしょう。魔王に守られるなら恥ではなくてよ」

「お前はまだ魔王じゃなかろーが！　つーか魔王になんのは俺だってつってんだろうが」

男だ女だと言うつもりはない。正直魔族において性別は強さに然程関わり無いからだ。自らの体に魔力を巡らせ防護、強化し敵を粉砕する――

つまりは魔力の高さと肉体のキャパシティが全て。そこに男女差は生まれない。ただし魔力を使わなければやはり肉体に男女の筋力の差は出るが。

「お前は魔王にはなれないわ」

「何を……っ」

かっとして振り向いて、そこにあったルクエールの表情にソウルは言葉を詰まらせた。

そこには揶揄や嘲りというようなものは無く、ただ――真剣に。

「私ならお前を裏切らず可愛がってあげるわ」

「必要無い」

だからソウルも手拍子で受けてのセリフではなく、きっぱり彼女の眼を見据えて言い切った。

「俺は俺の実力（ちから）で居場所を作る。お前は俺に追い落とされる心配をしているがいい」

(……揺らがないのね)

ルクエールの手を取れば楽なのに、自分の望まない妥協は絶対にしない。

「今日は戻って寝る。用があるなら明日以降にしろ。お前も戻れ。人間相手に後れを取りたくないならな」

そう言って再び歩き出したソウルを、今度はルクエールは追ってこなかった。

(良かった……!)

自分に付いてこなかったルクエールにソウルは内心冷や汗を流しつつ安堵した。

上手く逃げられた。良かった。本っ当に良かった。

足早にその場を離れつつ自分の部屋のある第一邸へと向かう。呼ばない限り人も来ないから大丈夫だとは思うが。

「――マナ、いるか」

「あ、お帰りソウル」

先に言い付けた通りマナは大人しくソファに座って待っていたよ

うだった。

2—3

「どうだったの？」
「親父を襲ってきた奴がいるらしい」
「お父さんって、魔王だよね」
「ああ」

一国の王が易々と襲われた、という事にマナは驚くが、ソウルの表情は淡々としている。知っている情報だから驚いたり何だりがないのは当たり前だが、それでも怒りとか戸惑いとか、そう言う物がない事に首を捻る。

「よくある事なの？」
「いや、他所は知らんがハインシュベルクではあまり無いな」
「その割に落ち着いてるっていうか……。でもその様子じゃ無事だったんだよね？」
「当然だ。魔王だぞ」

ラーの件でもそうなように、最大の実力者がそのまま魔王になる訳ではないが勿論最低限、実力が無ければ認められない。

「良かった」
「……そうだな」
「でも魔王が襲われたって事はソウルも危ないんじゃないの？　王子なんだし」

王族の血統。次代の王になるかもしれない者。マナの言葉には悪意なくそんな雰囲気が滲む。
ソウル自身が王になる、的な事を口にしたので当然と言えば当然で

ある。
――実際は王を狙ったものならばソウルが襲われる心配はない訳だが。
（確証はないがアレが親父を襲ったのと同じ奴等ならば、ルクエールを襲ったのもやはり『魔王』関連か……？）
「……ところでさ」
「うん？」
それはそれで魔王が無事だった事で話は一区切りと判断し、マナはおずおずと話題を切り替えて来た。
「こんな時に何だけど」
「何だ」
言い辛そうにしているから内容には予想が付いたが言わずに先を促した。
「さっきの話――本当に私が嫌じゃないなら、契約して」
まずは調子に乗るな、とかそんなような事を言われると思っていた。実際ソウルはそれくらいの事は口にする。だが。
「俺は契約してやってもいい――が、先に言っておく。俺は半端だぞ」
「半端？」
「純魔族じゃない。人間とのハーフだ。お前が『強い魔族』を求めるなら俺は止めておいた方が良い。認めさせたいと思ってる奴等から失笑を買うだけだ」
「え、それじゃあ」

父が魔王であるならば、そちらが人間の筈がないので。
「お母さんが？　そうなんだ……」
「そうなんだ。魔力で負けるつもりはないが、生まれはどうしようもない。何をしようと『それ』が無いから認められん。――お前と同じだ」
(同じ……そっか。やっぱりそうなんだ)
そうだろうと思っていた。ソウルの吐いた言葉の強さは本物だったから。
(それで、自分で頑張って来たから、怒ったんだね)
「どうする、マナ」
「――うん。やっぱりいい」
「……そうか」
「あ！　違うよ！　ソウルがハーフだからとか、そういうんじゃなくて！」
どことなく諦めたように頷いたソウルがネガティブな方向に考えている気がして慌ててマナは首と手を振って否定する。
「私、居心地を良くしたかったの。それに多分、強いソウルをダシにしようともしてた。あんた達が喚べもしないぐらい強い魔族と契約してやったぞって」
「判っている。そう利用して構わんといったんだ。……ナリが気に食わんか」
自分が威厳のある容姿をしていない事ぐらい自覚している。事実マナより背も低い。ラー程の容姿があればコンプレックスも持たな

いのだろうが。
「そうでもなくて。うん、やっぱり人の威を借るのは止めようかなって」
一族の誰も望めないような強い魔族と契約して、見返してやりたかった――けれど。
「それって凄く、情けないよね」
「そうか」
「うん。……ソウルは、強いよね」
「ふ、ふん！　当然だ！」
てらいなく微笑んで言われたマナの言葉にかっと顔を熱くして、ソウルは慌てて居丈高に腕を組み取り繕う。取り繕えていないが。基本的にソウルは他人に認められる、という事をされた事がなかった。その才がもたらす結果は重宝されてもソウル自身には『この半端が』という眼が突き刺さる。
「……なら、お前はもう人間界に帰るのか？」
だから少しばかり、残念な気がした。――マナと二人でいるのは、心地良い。
「そうだね。留まる理由は無くなったし、帰ってちゃんと、自分で頑張らなきゃね」
「そうか」
そうして心を奮い立たせているならば、そのうちに帰った方が良い。いつでも一歩目を踏み出す時が一番大変なのだから。

「ありがとう、ソウル」
「ああ。――送って行こう」
「え、大丈夫だよ」
来た時もこの魔王城にまで一人で来たのだし。まさかソウルからそんな事を言われるとは思っておらず、そちらに純粋に驚いた。
「いいから黙って送られろ」
「……うん。何か、照れるね。男の人に送ってもらうのとか初めて」
男の人、というよりも子という感じだが、そこはソウルを立てておく。
「そうか。光栄に思えよ。ハインシュベルクの王族に送られた人間の女などそうはいないぞ」
やはりマナからきっちり異性扱いされたのに気を良くしてソウルは鷹揚に頷くとマナと連れ立って城下に降りる。
「それで？　お前はどこから来たんだ」
行き来をする扉を繋げさえすれば、どこからでも通行可能だ。ただし勿論王城やその周囲など、いきなり出現されては困る場所には予め結界が張っており扉は作れないようになっている。こちらの方は魔族同士も想定して頑健なので、まず破られる心配は無い。……なかったはずだ。残念ながら今はもう断言はできなくなってしまったが。
「正門から出て少し行って、東の方に森が見えるでしょ？　そこか

ら」
「ファーブの森か。あそこは植物系の魔物どもが巣くっているはずだが……よく無事に通りぬけて来たな」
魔族に比べると魔物は知能も魔力も低いのだが、それ故に話も通じずタチが悪かったりもする。
「息を潜めながらね」
「そうか」
嗅覚、視覚は流石にごまかせないだろうがマナの実力があればいくらかは気配を殺しやり過ごす事も出来るだろう。魔力探査には元々引っ掛からないのだし。
ソウルの質問に答えた事で話は終わりと判断しマナは行きは満足に見る余裕の無かった表通りの賑わいを楽しそうに覗いていく。
「流石魔界随一の大帝国。活気あるよね」
「当然だ」
自分の好きな物を褒められれば誰でも嬉しい。ソウルも勿論。心なしか応じる声も弾んで頷いて――ふと露店の中に細工物の店を見付けた。丁度女性が喜びそうな。
「マナ」
「ん？」
くんとマナの袖を引きソウルはその露店の前まで連れて行く。
「買ってやる。土産にな」
「え、いいの？」

町の露店で剥き出しで売っている様な小物だ。そう高い物ではない。ましてこの国の王族であるソウルがそう金銭面で不自由する訳もないのでそちらに『良いのか』と伺いを立てた訳ではない。
――純粋に、自分に贈り物をしてくれるのかと驚いて。

「ああ」
「じゃあソウルが選んでよ」
「はぁ？」

言い出した方とは思えない声を上げ、ソウルとマナは互いに沈黙する。そしてしばらくして。

「……俺は人に物を選んだ事など無いぞ」
「ソウルが好きなので良いよ。ソウルと会った記念だもの」
「そ、そうか？」

自分で言った事ながら、まさかこんな事になるとは思っていなかったから照れる。陳列されている商品を見て――その中の一つを手に取った。花をモチーフに形作られた髪飾りだ。

「あ、可愛い」

マナの趣味ともそうはズレていないが、やっぱり可愛い系選ぶんだと何だかほのぼのとした気持ちになる。

「いいか？」
「うん」

マナが頷くとそのまま精算を済ませて渡そうとしてきたので、マ

ナは笑って自分の頭を指す。
「ね、ソウルが付けてよ」
「……嫌がらせか……？」
マナの髪に飾るには結構頑張って手を伸ばさなくてはならない。疲れる、し、格好悪い。
「ちゃんと屈むって」
くすくすと笑ってマナは身を屈めた。飾りやすくはなったが、これはこれで屈辱である。
だが楽しそうなマナは結構可愛かったから、何も言わずに動きやすくするためだろう、飾り気なく後ろで一ヶ所、ゴムで束ねられている部分に留めた。
「似合う？」
「良く分からん。ルクエールに言わせると俺はセンスが無いそうだからな」
「あー、あの人にはそうかもね」
ソウルの趣味は可愛い系だ。ルクエールのシック＆ハードが基本コンセプトの服装の中では浮いて似合わないだろう。
「でもそんな話もするんだ」
「……。煩い。行くぞ」
「はーい」

2―4

意外に嫌いでもないんじゃない？　とか口には出さずに表情でだけ言ってマナはソウルの後について歩き出し――はっと頭上を振り仰ぐ。

「ソウル！」
「っ！」

魔力で気配を悟るよりも早く、マナはその殺気を感じ取った。剣を抜き魔力で作られた氷の飛礫（つぶて）を薙ぎ払う。

「逃がすか！」

ルクエールが襲撃された時とは違い、継承権は無くとも王家の血を引いている事は引いているので今回ソウルは警戒を緩めてはいなかった。すぐさま襲撃者の後を追う。
当然の様にマナもソウルについて走る。――人混みが邪魔だ。

「見失っちゃわない？」
「一度捉えた魔力の感じを取違えるものか！　舐めるな！」

ソウルが言い切った通り、人の壁に少々邪魔されはしたが視覚に見えなくなった相手も見失う事はなかった。
しかし追いながら、ソウルの胸に妙な既視感が生まれる。
知っている気がする魔力なのだが、判らない。

（ここまで出かかってるのに思い出せん！）

物凄くもやもやする。だがそれも捕まえてしまえば全てが解決する事――
確実に差を詰めて来る相手を何とか撒こうとしたのか、細い路地に入った所で逆に人の壁が無くなって追い付いた。
「ふん。下らんミスをしたな。さあ、貴様の目的を吐いてもらおうか」
「ソウル！」
単純な追いかけっことなれば身体能力の差がまともに出る。途中で置いていかれたマナが合流して一瞬だけちらりとソウルがそちらへ視線をやると、狙って襲撃者が斬りかかって来た。
「ハッ！」
それで隙でも突いたつもりかとソウルは鼻で笑って手の平で刃を受け止めた。無論魔力でガードしているが。
「大丈夫？」
「当然だ。俺様が人間如きに後れを取るか」
そう、やはり襲撃者は人間だった。人と魔族では魔力の波長が違うので間違いない。
ちなみにそのカテゴリーで分けるとソウルは完璧に魔族になる。
「さて――」
改めて襲撃者を尋問しようとソウルが呼び掛けると、じりと一歩身を引いて――唐突にその後ろに扉が出現し、その戸を開いた。

「何っ！」
まさか一瞬で扉を作り出せるわけはない。それなりの大掛かりな準備のいる召喚術の一種なのだ。時間で出現を設定されていたのか、隠されているのに気が付かなかったか、とにかく襲撃者は身を翻して扉へと駆け込もうとする。
「逃がすか！」
人間界に逃げられたら追えなくなる。追い駆ける事は出来るが、ソウルが人間界に現れたら無用な刺激を与える事になってしまうだろうから。
振った大剣が微かに襲撃者の纏ったマントを引っかけ、フードが外れた。
「あ……っ！？」
「女ッ！？」
またかっ、と言うソウルの声と被せるように響いたマナの声は驚きに満ちていた。思わずソウルがそちらを見てしまうぐらい。
襲撃して来た方の少女も忌々しそうに顔を歪めてから扉の中へと消え去った。
（……逃がした）
あれだけ近くで接触したのに逃がしてしまったのは屈辱ではある。
だが。
「マナ」
「あ」

「今の、知り合いか」
「……うん」
とぼけられようとしてもあの態度で知り合いじゃない筈はないだろうと突っ込んでやる所だったが、マナは素直に頷いた。
「ユイリだった。……妹」
「何っ！？」
言われてようやくソウルは先程の既視感の正体に気が付いた。そうだ、マナに似ていたのだ。マナの方があんまりな魔力なので気が付くのが遅れたが。
言われてみれば、似ていた。
「どういう事だ。お前の一族は暗殺家業でもやっているのか？」
「そんな事してないけど……」
けれど間違いなく、ユイリはソウルを狙ってきた。
「あいつの魔力はルクエールを襲ってきた奴とも同じだった。偶然というにはあんまりだぞ」
「うん……」
偶然だ、などと往生際悪く認めないという事はしなかった。沈んだ声で頷いてから。
「……私、アルバトラズの一族なの」
「何っ！？」
ソウルの世代では直接的な関わりはないが、その名前には聞き覚

えがある。アルバトラズといえばかつての魔王討伐最盛期時代、勇者のパーティーに一人はいた魔術師の一族。

「私アルバトラズの当主の娘なの」

「……そうだったのか」

魔力が尊ばれる一族だと、マナは言った。確かにアルバトラズであればそうだろう。

まして当主の娘ともなれば当然強い魔力を期待されるはず。その一族の中で魔力を持たないマナの居辛さなど想像に難くない。

「うん。でも……どうしてアルバトラズが魔王を……」

「というより、どうやら魔王の血を引く者を、だな」

魔王関連だというのなら魔王本人とルクエール、そしてラーで事が済むはず。もっとも事情を知らなければ曲がりなりにも王の血を引いているソウル自身も可能性があると思われても無理ないだろうが。

しかしそれでも、理由が判らない。かつて敵対していた時ならまだしももう魔王を狙うような理由は無いではないか。

「それはとっ捕まえて吐かせればいいだけだ。また来れば、の話だがな」

「あの、ソウル」

「……判っている。殺しはせん。俺はな」

――他の誰かに見付かった時は流石に保証はできないが。

「ありがとう」

「別にいい。それよりお前はさっさと帰れ」

「そうだね」
先程までとは少し事情が違う。マナには急いで帰る理由ができてしまった。
「ねえ、ソウル」
「何だ」
人間界へと通じる門を開き、マナは最後に、というようにソウルを振り返った。
「私、向こうで何でユイリが魔王を狙ってるのか調べてみる」
「余計な事はしない方が良いんじゃないのか」
ただでさえマナは一族の中で立場が無いのだ。これ以上望んで煙たがられる様な事をする必要もないだろうと忠告する。
「うん、でも――」
納得できない、というのとは違う。正直マナにとっては魔王など他人よりもさらに遠い存在だ。伝え聞いただけならばどうでもいい部類に入る。
しかし魔王は、ソウルの父だ。
「もし、ソウルの家族が殺される前に止められたら……また会ってもいい？」
「ふん。人間などに殺されるわけがなかろう。大体お前に咎はない。

いつでも来るがいい」
「私が会えないよ」
会えなくなるのは寂しいと、マナは少し悲しそうに笑った。少しだけ自分と同じ苦みを知っている、初めて出来た――友人。
「じゃあね、ソウル」
「あぁ」
手を振り、門の奥へと入って――マナは帰った。しばらくすると門も消え、おそらく向こう側に無事辿り着いたのだと思われる。
「……さて」
自分も帰るか、とソウルはくるりと門のあった場所に背を向け歩き出す。
（しかし――……）
ユイリが襲ってきた時に殺してしまうと、マナに会えないのか。それは少し嫌だなと、マナの泣き顔を想像してしくりと胸が痛んだ。

第三章　父と従姉と兄の事

（父、ルクエール、そして俺……とくれば、次はラーだろう）

ラーはこのハインシュベルク最強の力の持ち主で、悔しいが自分やルクエールとは格が違う。おそらく父をも凌ぐだろうとソウルは思っている。

なのでソウルやルクエールの襲撃に失敗してなお、ラーに手を出して成功するはずが無いのだが。

（そんな情報を得ている訳もない）

性格上、ラーが力を振るう事は稀だ。例えどこかでその強大な力を伝え聞いたとしても、魔王を襲ったぐらいだ、来ない訳が無い。

（だから——）

襲撃者——ユイリを捕えるには、ラーの側にいた方がいい。

（とにかく目的が何か聞きださんと話にならん。それから人間が魔族を襲うなど無意味である事を判らせなければ）

いや正確には理解などされなくても構わないのだが。襲ってこなくなりさえすれば。

——という訳で、ソウルは早速ラーの部屋に入り浸っていた。

正確にはラーの側に、だが。

「……ソウル」

「何だ」

「今度は何だ？　ルクエールから逃げて来た感じじゃないが」
「気にするな」

人の部屋に居座って気にするなも何もないものだ。普通、他人が四六時中隣にいればいやでも気になる。
もっともラーがその限りにない事も確かだが。

「護衛のつもりか？　まさか」
「お前にんなもん必要無かろう」
「そうだな。じゃ、お前は何でここにいる？」
「この舐めた真似をしてくれている奴に用があるだけだ」

ユイリを捕えたいのも勿論だし、ラーにユイリを殺させたくないというのもあった。
ソウル自身でなくてもソウルの血族が殺してしまってもやはり結果は同じだろう。
そしてラーなら、襲われた瞬間相手を瞬殺出来るし、する。

（もう一回ルクエールの方に行くかもしれんが……）

そちらに居座るのは自分が嫌なので。

「馬鹿な事をするもんだ」
「何？」
「人間に魔族が殺せるはずもない。馬鹿げた方法を取るもんだ」
魔物や、魔力の低い魔族までならばとにかく、ソウルも全く同感である——が。

「らしくないな」

ラーがそんな事を口にするのが、らしくないと思った。
「そうか？」
「ああ」
「俺の中ではそうでもないんだがな」
ラーは基本、感情の起伏が少なく、無感動だ。だが好きな事も嫌いな事も少ない分思い入れが深い。
もしそれに引っ掛かったとラーが感じているのだとすれば確かに『そうでもない』のだろう。
「っつーかお前今『方法を取る』っつったか？」
「ああ、言ったな」
ユイリの襲撃だけに当てはめるには少々おかしい文法だ。それではまるで――
「後ろに何かいるって事か？」
「そう言ったな」
そして今の言い様からするならば。
「――魔族か？」
「そうだな、多分」
「誰だっ!？　つーかお前が判ってるって事は知ってる奴なのかっ!？」
勢い込んで身を乗り出しそう訊いて来たソウルにラーはつまらなさそうに鼻で笑った。

「自分で調べろ。俺にお前に教えてやる理由は無いだろ？」
「……そ、それはそうだが」

それぐらい――と思わなくはない。

（どこまでも怠惰な奴め！）
「お前は判ってて放置しておくつもりなのか？　鬱陶しくは無いのか」
「不快ではあるが、鬱陶しいって程じゃない。どう転ぼうが俺の知った事でもない」
「……そうか」

ラーは本気だ。自分も命を狙われているであろう一件にも何にもする気がないらしい。
（まあ、ラーの力を持ってすれば人間の刺客など物の数ではないという事か）

ソウルとてマナと知り合った後でなければ、彼女に好意さえ持っていなければ、襲ってきたら見つければ良いで済ませていただろう。それを考えればあながちラーが無気力だとは言えないのかもしれない。

「ソウル」
「何だ」
「襲撃者を待ってるならルクエールか親父の所、もしくは一人でいた方がいい。俺の所にゃ来ないぞ」
「何？」

確信的な物言い。ソウルを追い出したいがため――という訳ではなさそうだ。
元々ラーはソウルが部屋にいる事を気にしないのだから、おそらく本当だろうが。
「……訳判らんぞお前」
教えてやる理由は無い、とか言いながら。
「俺の中では普通だがな」
本人が言うのだからそうなのだろうが。……理解不能だ。
「まあ、いい。確かに俺も狙われているようだから一人になるという選択肢はアリだと思うしな。……ラー」
ラーの心配はしていないから、別に一人にしても問題ない。だがラーに関して心配な事はある。
「何だ」
「もしお前の元に刺客が来ても、殺さんでいてくれるか」
ラーの実力があれば十分に叶う事。だがそうしてやる理由は無い事。
「ああ、構わないぜ」
手加減など面倒なだけだろう。だがあっさりとラーはそう頷いた。
「……頼んだ」

安請け合いだが信用する事にした。何よりラーの確信が正しければ彼の元には襲撃者は来ないとの事だし。
案外、そう思っているからあっさり頷いただけかもしれないが。
（しかし、魔族が人間を使ってか）
何故わざわざそんな事を？
（発覚を恐れて、かもしれんな）
人間を使えばその背後に魔族がいるなどとは思われない。ラーに言われなければソウルとてそんな事など思いもしなかったし、ラーでなければ鼻で笑っていた。
（親父や俺達を殺して得をする者……。魔王の座を狙う誰かか、他国のどこかか。だがそれにしても腑に落ちん）
もし自国内で魔王の座を狙う誰かなら最有力候補のラーを放っておいては意味が無い。いかに自堕落なラーとはいえ、己の一族を殺して成り上がる魔王など認めまい。それぐらいなら自分が王の座につくだろう。
それにそれだと、そもそもソウルを狙う理由が無い。
（単純に気に食わんからか？　それだとルクエールが襲われたのが判らんしな……）
魔王は人間の女を娶ったから、という理由でソウル共々対象になるかもしれないが、ルクエールは純血だ。
女性の魔王就任も歴史の中で少なくないので、その辺の反発という

のも無しだ。

（……判らん）

ソウルも頭の出来は悪くないつもりだが、いやむしろ良いが、ラーの出来はやはり違うのだろう。

3―2

「――あ、ソウル！」
「げっ」
考え事をしていたので向こうの方に早く気付かれた。ここまで来て眼前で引き返すのは負ける様で嫌なのでそのまま進む。
「迎えに行こうと思ってたのよ」
「何か用か」
「襲われたそうね」
「ちッ」
ほんの昨日の事だというのに耳が早い。いかにも嫌そうな舌打ちをするソウルに、ルクエールは青筋を浮かべた。
「どういう意味かしら？」
「つーかだからどうした」
「そうね。お前が襲われたという事は王座狙いではなさそうね」
「どうだか。気に食わないから、というだけで俺を殺そうとする奴は少なくないからな」
ソウルに関しては目的と何ら関係無い、という事も有り得るのだ。
「どうかしら。お前を殺したい者達がいるのは否定しないけれど、目的があって企てを行っているのなら、その最中にそんな余計な事をするかしら？」
「……」

もっともだ。そんな事をするのは余程の馬鹿だなとソウルも心の中で頷く。あくまでも心の中でだけ。

「何にしても、無事で良かったわ」

「貴様俺を舐めてるのか？　俺に負けた分際で」

純粋な心配に雑言で返って来た事に対しても勿論腹立たしかったが、それ以上にその内容はルクエールのプライドを傷つけるもので、自制の為に強く拳を握った。

「子供の頃の話よ」

「今でも変わらんわ」

「……どうかしら」

周りの空気が一段冷えた。ルクエールの纏う氷の魔力が濃くなったのだ。

「ふん。拮抗しているのは今だけだ。貴様と俺の外見を見ろ。既に貴様は成人近い。もうそう魔力の伸びは期待できん。所詮貴様と俺様ではキャパシティが違うのだ！」

魔族の外見年齢はその者の魔力量による。時を重ねるにつれ魔力は増え、その力に体が耐えられなくなった時に成長していく。

つまりより強大な魔力を身に付けられる者ほど成長は緩やかだ。既に七千を数えるラーが未だ十七、八程度で千八百歳のルクエールとそう変わらない外見なのもその証。

「そうね。ハーフのお前が正しく魔族と同じなら、だけれども」

「っ……」

それが唯一の不安材料だ。例が少ないだけに、いつどうなるか知れない身。ぎ、と唇を噛んでソウルはルクエールを睨みつける。
（……別に喧嘩をしに来た訳ではないのだけれど）
挑発に乗ったのはこちらだが、今日はそんな気分にはならない。魔力を収めるとソウルが意外そうな顔をした。
「私はお前を気に入っている、と言っているわよね」
「俺はお前なんぞ大嫌いだ」
「……知ってるわ」
第一印象は何でもなかったろうが、その後がまずかった。ルクエールもそれは認める。好かれるような事はしてこなかった。出来なかった。
——恐かったから。

「どうしてお前は半端なのかしらね」
「俺様のが聞きたいわ」
「そう言えばあの人間の女、どうしたの」
どちらかと言えば、ルクエールにとってはこちらが本題。妙にソウルがマナを気に入っていたらしい所が気に掛かっていて、その所在を訊ねた。
まさかと思うのだが、ソウルは生まれと育ちもあって体制に反する事を厭わない。もしかしたら——
「とっくに帰ったぞ」
「そう」

さらりと答えたソウルに嘘は見えなかった。あまり嘘をつくのは上手くない男だから、本当だろう。
――ほっとした。
「人間が一体何をしに来ていたのかしらね」
「……」
マナの目的を、勿論ソウルは知っている。しかしそれをルクエールに言っていいものかどうか。いやそもそも別に言う必要はあるまい。
……馬鹿にされる気がする。自分が契約に応じてもいいと思っていた事も含めて。
「ソウル？」
しかしソウルの沈黙はルクエールに不審を与えた。呼び掛けられはたと気が付いて。
「珍しいではないか。お前が人間に興味を持つとは」
「興味など無いわ。お前が構っていたという以上のものはね」
言い方は過去系だ。マナが帰った以上、終わった事として済ませて当然だ。
「ガキの頃の事をネチネチと……。いい加減貴様も大人になれ。そもそも俺が気に食わんからと言って俺が好いたものを壊そうとはどーゆー考え方だ」
「子供なのはお前でしょう？」
「何をッ！？」

呆れて息をついたルクエールにソウルは素直に噛みついた。この素直さも、嫌いではなく。

「私はお前が気に入っている、と言っているのよ」

好きだ、とは言えないのは――自分の弱さ。

「う、嘘こけ。気に入っている相手を殺そうとするか？」

「いつの話をしているのよ」

言われてソウルは言葉に詰まった。ルクエールの仕掛けてくるものの質が変わっていたのは判っていたから。

「気に入らなかったのは本当よ。自分に勝った相手がよりにもよって半端だったんだから」

「やはりそうではないか」

「――気に入らなかった……、と言っているの。私は」

「……っ」

流石に言われている意味が判ってソウルは戸惑って息を飲む。ルクエールの眼が泣きそうだったから。

初めて見た。泣く事なんか無い女だと思っていた。女らしい可憐さや清楚さや繊細さなど見た事も無かったし。

――いや。

見てなど、来なかったし。

「……じゃあ、お前本気で俺を愛人にしようとしてたのか？」

愛人に本気というのは変な表現だが、ソウルとて自分が王座に望まれない事など十分承知している。判っていて狙う決意をした訳だ

が。
ソウルの言っている『本気』とは裏も表も無く、という意味でだ。

「……そう言ってるでしょう」
「……俺の意思は無視かい」
「だってどうせ頷かないでしょう？　プライドの高い男だものね」
（男、か）

そうか本当にそう見てたのか。それは――嬉しくない訳ではない。己のキャパシティの証明ではあるが、幼い容姿を気にしていない訳でもないし、自分を認めてくれる存在は本当に少ないから。

「それとも、大人しく納まってくれるのかしら？」
「悪いがごめんだ。大体俺は女の下に敷かれるのは好きではない」
「じゃあやっぱり、仕方ないわね」
「……まあ、そうだな」

愛人など絶対ごめんだ。ルクエールの気持ちが本物でも。彼女がどうしても諦めないのであればソウルの方向性も変わる事は無い。

「まあそれも全て片付いた後の話、ね。今のままではちょろちょろ鬱陶しくて仕方ないもの」
「それは同感だ」

自分を嫌っている訳ではない相手に構える必要はない。格段に態度を軟化させたソウルにルクエールは微笑する。

「っ」

綺麗に、嬉しそうに笑うその表情が何故かぐらいはソウルにも判

る。人に聞けば間違いなく『美人だ』と返って来るであろうルクエールを初めて女として――可愛い、と思った。

（いや！　断じてそんなのとは別物だしなッ！）

「ソウル？」

微かに頬を染めたソウルにルクエールの方が首を傾げた。自覚は無い。というよりもきっと意識してやったものでもないだろうし、そもそもソウルが自分を意識するとも思っていないのだ。

3―3

「ラ――、ラーに言わせると糸を引いているのは魔族らしい」
「何ですって？」
もう別に、あらゆる部分でルクエールに意地を張る、という事はしなくていい。譲れない所は勿論譲れないが、共有した方が良い情報は共有するべきだ。
ソウル同様ルクエールにとっても考えの外の事だったか、とにかく話を変える事には成功して、ほっとした。――かなり。
「魔族が人間を使っているというの？　そんなプライドの無い真似を？」
「ラーが言ったのでなければな」
「……そうね」
何を馬鹿な事を、と切り捨てられないのはルクエールも同じ。
「知っている相手、かしらね」
「だろうな」
辿り着く発想もやはりソウルと同じ。
「心当たりはあるか？」
「いいえ。考えてもなかった事だから。それに向こうが知っているからと言って私達が知っているとも限らないし」
「……それはそうか」
何しろ狙われているのは王族である。国民は勿論、他国の者だっ

て知っている者は知っている。

「何しても、次に来た奴は必ず捕まえてやる」
「ええ。そうそう逃げられるのも面白くないものね」

襲撃しても軽々と逃げられるとか、そんな話が流れては沽券に関わる。それは勿論だが、ルクエールに関しては、心配事がもう一つ。

（こいつは、殺すな？）

自分を襲ってきた相手は躊躇いなく殺すだろう。それを咎めるつもりはない。ソウルとてそうする。普段ならば。
しかし今回に限っては、それは困る。

（つってもこいつは理由を言っても頷きゃしないだろうし）

理由を知ったら尚更だろう。ソウルがマナと会う事そのものが、ルクエールにとって面白くないのだから。
そこまで思い至った訳ではないが、ルクエールの性格上人間に手加減するとは思えなかったので。

「……ルクエール」
「何？」
「この件が片付くまで俺と共にいろ」
「――え？」

思ってもいなかったソウルからの提案にルクエールは呆けたような返事を返す。

「そ……それは、私は構わないけれど、お前、どうして？」

「う、煩いッ！　いいからお前は俺といろッ！」
「――はい」
頬を染め、こくんとルクエールは頷いた。
理由など言えるはずも無いので怒鳴っただけだったのにと、ルクエールの素直さに違和感を覚える――が、都合は良いのでスルーした。
(後は親父か)
シュツィルオーレは事実上の王妃であり、若干狙いに掛かる気がしなくないが、彼女を抑える術はないのでユイリが彼女の元に行かない事を祈るばかりだ。ラーが彼女の名前を出してこなかったのにも彼女を避ける事の後押しとなっている。
「ルクエール、お前先に俺の部屋に行ってろ」
「部屋、に？」
「その方が色々都合もいいからな。俺は少しやる事があるから後で行く」
「……ええ、判ったわ」
薄く微笑しルクエールは頷いた。仄かに顔が赤い。
そのルクエールと別れてソウルはそのまま魔王の私室へと向かう。
(シュツィルオーレがいなきゃいいんだが)
現在の魔王の妻の中で、一番位が高いのがシュツィルオーレなのだからいてもおかしくはないが、あの女がいると話どころではないのでそう願っておく。
「親父、入るぞ」

扉を叩いて中に入ると、運のいい事に魔王がいた。そして更にシュツィルオーレはいない。

(良し！)

「どうした、ソウル」

「……一つ親父に頼みがある」

「珍しいな。何だ」

「——……お、親父はどう考えている」

いざ言おうとすると中々に言い辛くて、用意していたはずの物ではない言葉が口を突いた。ラーやルクエールとは気安さが違う。

「何をだ？」

しかし寸前ですり替えられ、核心から逸れたソウルの言葉にも魔王は気にせず先を促した。

「今回の事についてだ。親父も実は犯人に当たりが付いているんじゃないのか」

「も、という事は、ラーか」

「そうだ」

「あれは出来が違うからな」

くつくつと楽しそうに笑って魔王はそんな答えを返した。

「……判らんのか」

「残念ながらな。王はただの国の頂点。その他は何らお前等と変わりないのだよ、ソウル」

長く生きている分、様々な事が出来るようになる。経験も増え、突発的な出来事にも強くなっていく。
だが——それだけだ。

「……何で母さんを、その、アレしたんだ。シュツィルオーレがいたのに」
「いかがわしいな」
「やかましいわっ！」
ソウルの言い様に吹き出し、肩を震わせる魔王を怒鳴りつける。怒鳴りながらも顔が赤いのは流石にソウルも恥ずかしかったからだ。
「惚れたからだ。それ以外に理由は無い。愛した女との子供だ、お前も可愛く思っている。残念ながらあまりあいつには似ていないが——いや、そうでもないのか」
「嘘こけ」
子供の頃から魔王に可愛がられた記憶は無かった。いや、勿論可愛がって欲しかったなどと、そんな女々しい事は言わないが！

「そうだな」
可愛く思っている、などと言いながらあっさり魔王はそう肯定した。その態度に腹の中がムカムカする。
判りやすいソウルのその感情にふっと魔王は薄く笑う。
「俺はお前の安らぎの場とはならなかった」
「別にそんなもん期待しちゃない」
「そうだ」

だからこそ、今ソウルはラーと良好でいられるのだ。

「俺はもうそう長くない」
「……何？」
「魔力が衰えていくのが自分で判る。老いも進んで来た」
今の魔王の外見は四十の半ばぐらいだろうか。言われてみれば確かに随分年を取った。

「ソウル、ルクエールの力になれ」
「なっ、何だとッ」
まさか魔王からそんな事を言われるとは思わなかった。狼狽するソウルに魔王は至極真剣な様子で言葉を続けた。

「ルクエールなら最後までお前を守ってくれるだろう」
「ふ――、ふざけるなッ！　俺は誰に守ってもらう必要も無いわッ！」
「いいや。お前には必要だ」
確信した物言いにソウルの心臓はどくりと鳴る。当り前だ。こうきっぱりと言われて不安にならない者がいるものか。ましてソウルは――自分に対して、自信の基盤となる物が欠如しているのだから。

「俺が……俺が弱いとでも言いたいのかッ！」
「そうだ。お前は脆い」
「ふざけんなッ！」
ばんッ、と机を叩いて立ち上がり、息荒く魔王を睨みつける。全

く揺らがない瞳が静かに見返して来るだけでソウルは舌打ちをして席に着く。
そうだ、別にこんな事をしに来た訳じゃない。
「頼みがあると言っていたな」
ソウルがその話にもう聞く耳を持たないであろう事を察して魔王の方から話を戻した。
「……ああ」
「何だ」
気まずい。しかし言っておかないで手遅れになるもは嫌だ。
「今後も襲撃は続くだろう」
「そうだな」
「襲撃して来た人間を殺さずにおいて欲しい」
「何故だ」
馬鹿な事をと一蹴される事は無かったが、代わりに当然の疑問を問い返された。
「頼む」
「自分を襲う相手を見逃せと言われているのだ。理由ぐらいは話すのが筋だろう」
「……」
「ソウル」
促され、ソウルは嘘をつくべきか正直に言うべきか諦めるべきかを迷った。

嘘をついても魔王はそれぐらい見抜いて来るだろう。そもそもそんな都合の良い嘘など思い付かないし、用意もしてこなかった。
大体、好きではない。

（構うか）

ソウルがマナに何を想おうと、魔王にだけは咎められるいわれは無いのだ。

「そいつは俺の友人の家族だ。だから殺してやりたくない」
「人間か」
「……そうだ」
「全く……いつの間に」

ふうと溜め息をついて苦笑いをする魔王には、やはり怒りや何かといった感情は見えなかった。黙ってその先の答えを待つ。

「周りに知られたら、何を言われるか判っているのか？」
「煩い」
「賛成はせん……が、まあいいだろう。無闇に他人に知られるなよ」
「……あぁ」

忠告は付いてきたが、思ったより渋い顔もされずにあっさり頷かれた。

3—4

（ともあれこれで、襲われそうな所は回った訳だな）

後はユイリを待って捕え、黒幕を吐かせればいい。ラーの言う通り同じ魔族であるのなら報復は当然で遠慮もいらない。ルクエールを待たせている自室へ戻るべく、ソウルが席を立つ——と同時に扉が開いてシュツィルオーレが入って来た。

（げッ）

「……汚らわしい」

眉をひそめて吐き捨てるシュツィルオーレの横を、無視してさっさと通り過ぎた。最後に会ってしまったのは不快だが、まあ運は良かった。用件は全て済んでいる。

不快な物はさっさと忘れる事にして部屋へと急ぐ。この間にもルクエールが襲われ返り討ちにしていたらと思うと気が急いて仕方ない。それでも騒ぎは起こっていないから、今のところは何も無いのだろう。ルクエールが手加減する訳が無いから、彼女が魔術を使えば相当の騒ぎになる。

「——入るぞ」

自分の部屋に入るのに声を掛けるのも不思議な感じだが、中には一応女がいるので。

「お帰りなさい、ソウル」

「ああ」

「何の用だったの？」

「つまらん用だ。何でもない」
「……そう」
当然気にはなっているようだが顔に出しただけで問い質すのは諦めた。
「……まあ、いいわ。それより――私、何もしないで時間を潰せるほど暇ではないのだけれど」
「黙ってついてきといて何を言うか。この件が終わるまでだ」
「……それが判らないのよね」
誘われた時点で気が付くべきだったが、正直舞い上がっていて気にもしなかったのだ。しかしルクエールからしてみればやはり色々おかしい事だらけで。
「……私が人間如きに後れを取ると思っている訳ではないわよね？」
想われているとしたら大層屈辱だ。
「あぁ」
「何故一緒に居ろなどと言ったの？」
「……っ」
どう答えたものか、言葉を詰まらせうろたえたソウルをきつく見詰めていた目をふっとルクエールは緩めた。
その表情を保つのに耐えられなくなったかのように、代わりに浮かんだのはどこか諦めたような悲しげな表情。
「どうせ心配してくれたわけではないんでしょう？」
「っ」

言われてようやくソウルは彼女に酷い事をしたのだと気が付いた。好きだと言ってくる彼女に対して無駄に期待させるような真似を。

（いやでも！　どう言えっつーんだッ！）

「ソウ……っ！」

「っ！」

更に問い詰めようとしたルクエールだが、ヴ、とすぐ近くに発生した魔力の歪みに二人揃ってはっとする。人間界と魔界を繋ぐ門の出現だ。

「来たわね……っ！」

「待て、ルクエール！」

ニィと凶悪な笑みを浮かべて駆けるルクエールを追って、慌ててソウルも走り出す。まずは黒幕を吐かせるのが目的だからいきなり殺しはしないだろうが、障害が残るような傷もまずい。

（だが何故城の中で門が……ッ？）

厳重に張られた結界を破って門を開くとは、人間業ではない。いや、正直魔族でも――ソウルであっても難しい。黒幕である魔族が噛んでいるとしても、結界を熟知した者でなければどうにもなるまい。

だがつまりはそういう事で、それだけの実力者が糸を引いているという事だ。

ソウルとルクエールが歪みの中心に辿り着いた時、丁度扉を抜けて一人の少女が現れた所だった。そしてその少女の姿は。

「――マナッ？」

思わず口を突いて出たソウルの言葉に少女は振り返った。その顔を正面から見て違う、と気が付いた。ユイリの方だ。

「気に喰わない顔だこと！」

すでに帰っているとはいえ、ルクエールにとってマナの存在は面白くないものだ。昨日一日ゆっくり休み、今は魔力も万全だ。

「待て！」
「判っているわ、殺しはしない！」
「違っ……違わんが、ちょっと待て――ッ！」

もうソウルの言葉には耳を貸さず、ルクエールは槍を作り出しはるか間合いの外から一薙ぎした。
その薙いだ風圧が空を切り、衝撃波という形になってユイリへと向かう。
氷の魔力の乗ったその衝撃波に掠った木々が一瞬で凍りつき、内側から四散する。とても『殺す気が無い』威力とは思えない。

「フレイシール！」

持っていた杖を構えユイリは自分の周りに結界を張る。ルクエールの魔力と拮抗し、刹那の攻防の後衝撃波を散らす――が、その時にはもうルクエールの間合いの中。何をする時間もありはしない。

「っ！」

息を飲み、何も出来ないままただ杖を抱えて身を引いたユイリの

前にソウルが立ち塞がり、ルクエールの槍を受け止めた。

「ソウル！」

叫んだルクエールの声には戸惑いと、何より非難が色濃く出ていた。

「……っ？」

驚いたのはユイリも同じだ。訳が判らず、自分がどう動くべきかを迷ってソウルの背中の後ろで固まっている。

「どういうつもり？」

「お前が斬ったら一撃で死ぬだろうが！　つか殺す気だったろ貴様！」

「気に入らない顔だったからね」

あっさりそう認めてルクエールは槍を肩に担ぐ。危なかった。

「おい、貴様」

ルクエールがとりあえず矛を納めたので、ソウルは改めてユイリへと向き直る。するとはっとして杖を強く握り締めて一歩下がる——が、攻撃はしてこなかった。

「正直に答えればこのまま帰してやる。貴様に俺達の暗殺を頼んだのは誰だ」

「……っ……」

「素直に喋る訳が無いでしょう。お前は何だかんだ言って女に甘いものね。私に渡しなさい。一日で吐かせてやるわ」

「待たんか！」
物騒な事を言うルクエールを慌てて止める。そんな事をさせたら一緒に居た意味が無い。
「何故？」
「……寝覚めが悪い」
「報復を言い出したのは元々お前でしょう？　何を言ってるの」
ソウルは確かに女性に甘い所があるが、戦いとなれば全く別である。『敵』である者に男だ女だなど関係無く、敵には容赦など無い。だとすれば。
「……。お前、こういうのが好みだったの？」
あと手加減をしそうな理由といえば、それぐらいかと思って言ったセリフ。
「馬っ、馬鹿者！　そんな訳あるかッ！」
「じゃあ何だというのっ！　あの小娘にしてもこの小娘にしても、色々足りない事この上ないでしょう！」
ぐっと反らして強調されたルクエールの胸が弾んで揺れる。うっと顔を強張らせソウルはじりじりと身を引いた。
「だ、だから違うといっとろーが！　大体俺はな、女らしい女が好きなのだ！　その点で言えばお前もマナも俺の好みからは程遠いわ！」
「失礼な！　私のどこが女としての魅力が無いとっ？　見せてやりましょうか？」

「そーゆー所がだァァァァ！」

服に手を掛けたルクエールに顔を赤くして思い切り首を左右に振りソウルは後ずさる。体の話などしていないというのだ。

3—5

「……マナ？」

ソウルの叫んだ名前に反応し、ユイリはぽつりと呟いた。声は決して大きくはなかったが、その一言を境にしんと当たりは水を打ったように静まり返った。

それはその一言に、ただならぬ悪意が含まれていたから。

「……そうか。あんたあの時の魔族か」

ユイリの言葉に、どういう事だとちらりとルクエールはソウルを見る。途端うろたえて眼が泳ぎ知っていたのだと良く判った。この反応で知らなかったという事もないだろう。

（だから私と共に？）

放っておけば自分がユイリを殺す事など容易く想像出来る。だとしたらソウルが一緒にいろと言ってのも、ただこの女を守るためで——

そして既にソウルがユイリと接触しているのならば。

「ソウル。お前何か知っているんじゃなくて？　私に言っていない事を」

「ふ、ふん！　何も全てを共有する必要は元々ないはずだ。俺が何を知っていようと知らせまいと、とやかく言われる筋合いは無い！」

「お前……ッ」

流石にバツは悪そうだったが、内容に対する反省は無い。握った

拳が屈辱と憤りにぶるぶると震えた。

（よりによって人間などに――ッ！）

「ル、ルクエー、ル？」

「ソウル。お前にはやはり調教が必要だわ」

暗殺騒ぎの中心に近付けるであろうユイリの存在も、今のルクエールには取るに足りないもの。逃がそうが巻き込まれて死のうがどうでもいい。大体人間などを使って襲ってくる段階で、もう相手が矮小な輩だというのは知れている。

「お前は私のものなのよ！」

「違うっつっとろーがッ！　あッ！」

ソウルとルクエールの構えが本格的になると、さっとユイリはその場から駆け出した。当然といえば当然だ。

「おい！　逃げられるだろうがッ！」

「構わないわよッ！」

怒鳴るソウルにそのままルクエールも怒鳴り返して来る。その態度がイライラした。

「貴様、いい加減にしろよッ！　例えそれで俺がお前に服従して、満足か！」

もし自分がルクエールの立場であれば、そんな形は望まない。自分が好きな相手には、笑っていて欲しい。笑ってもらえる世界を守ってやりたいし、そして何より、自分を好きになって欲しい。

「満足な訳ないでしょう！」
ルクエールとて判っている。判っていて――そう言っている。

「私はお前のようにはなれないわッ」
「……ルクエール」
「それでも、私は……」
「……悪かった」
「……いいえ」

ふ、と息を吐いてルクエールは槍を下ろし、魔力を収めた。
『ルクエールの力になれ』ふとそう言った父の言葉を思い出す。父はルクエールの自分への想いを知っていたのだろうか。だからあんな事を言ったのか。
確かに――魔王となるルクエールと共にいれば、安泰だろう。例えこの先どうなっても彼女は決してソウルがハーフだから、という理由で無意味に迫害はしてこないだろうから。
まして父の言うように、ルクエールの望むように『愛人』という枠に収まり彼女を愛せれば。

（……冗談じゃないッ）

ルクエールへの苦手意識は嫌いと言うまでのものではなくなったが、そもそも女に守ってもらうなど、そんな生き方は御免だ。
いや、女でなくても他の誰かの恩恵で生きていくなどソウルのプライドが許さない。

「お前は一体どうしたいの？」
「黒幕を吐かせ制裁を加える。それだけだ」
「それだけ、ね」

言うだけならその通りだ。しかしソウルの言葉の意味を判っている今では溜め息が一緒に出る。

「黒幕だけを――ね」
「……そうだ」
「お前、あの小娘と関わりがあるのを知っていたわね」
「……ああ」

誤魔化して誤魔化しきれるものではないだろう。ユイリとマナの顔立ちは明らかに姉妹だろうと判るぐらいには似ているし、不自然なソウルの態度にもそれできっちり説明が付いてしまうので。

「……あの女の、何が良いというの？」

『人間』というくくりを無しにした『マナ』という女に対しての、女としての嫉妬。

「馬っ、話を飛躍させるなっ」

少なからず、マナを女として見ていないとは言わない、勿論。しかしルクエールが言うほどはっきり意識はしていなかった。
正直――その手の感情はまだよく判らないのだ。
マナの事は結構好きだが、同士としての情の方が深い。いっても友人、ぐらいだろう。

「マナは俺と同じだからだ。それに煩わしい事を考えなくて済む。関係の無い人間だからな」
「同じ？　お前と？」

関係無い、の辺りは判る。ソウルがハーフであろうと純血だろうと、人間であるマナにはそれこそ関係がないからだ。それはソウルにとって確かに気楽だろう。

「あいつの一族はアルバトラズだ」
「アルバトラズ……って昔人間達のパーティーに必ず一人はいた、あの？」
「ああ」
「ふぅん……そう。まだ続いてるの。珍しいわね」

ルクエールの感想を聞いて、そう言えばそうだと言われてから気が付いた。ソウル達にとっては数百年も人生の一部だが、人間にとってはかなり長い時間。
英雄の血族だってパタパタ絶えて行く中で珍しいと言っていいだろう。
だからこそ――無駄な所にまでプライドが高いのだろうと、そうマナへと同情する。

「けれどそれならあの小娘に聞けば判るのではなくて？」
「マナは何も知らん。お前も感じただろ、マナには魔力が無い。アルバトラズには不要な人材だ」

例え当主の娘であっても――

「そう」

その答えにルクエールは納得して頷いた。マナの一族での立場がどうだろうが、ルクエールには興味の無い事だが。

「それでお前と『同じ』なのね」

「そうだ」
そんな事で、という思いがルクエールの中に浮かんだが、寸での所で口には出さずに飲み込んだ。その程度の事ですら特別になってしまう程、ソウルにとっては根深い劣等感になっているのだ。乗り越えた訳ではない。気にしないほど無神経でもない。ただ負けない為に強くなろうと、強がっているだけ。

(私なら)

そんな傷を負っている事も忘れるぐらい、守ってみせる。いや、そうしなければならない。
それ以上の感情を与えられなければ、きっと自分に彼と付き合う資格は無い。その傷をまた一つ深くしてしまった自分だからと、そう――思った。

「とにかく、俺はあいつを追う。これ以上舐めた真似をされたくないのも本当だからな。……お前はどうする」
「行くわ」
「……」
ルクエールが行くという選択肢を取ると予想していたのかしていなったたか、どちらにしてもソウルは微妙な表情をした。ユイリを追うのに側にいられるのも嫌だが、やはり放っておくのも心配だという所か。
「心配しなくても、もう殺そうとはしないわ」
「……何故だ」
「とりあえず、お前があの小娘を庇うのが恋愛感情ではないと納得したからよ。心を慰める為だというなら、まあ許してやらなくはな

いわ」
「何でエラソーなんだオイ」
ルクエールの言い様は面白くないが、言われた内容自体は少し、嬉しかった。
ルクエールの譲歩はただ自分の為にだったたから。

「ルクエール」
「何」
「すまん。……ありがとう」
「っ」

かぁ、とそれだけで頬が熱くなり単純な自分が恥ずかしい。

（仕方ないじゃない）

ソウルとこうして話す事自体稀だったのだから。まして謝られるなんて。礼を言われるなんて。
――笑ってくれるなんて。

「行くぞ」
「ええ」

（――ん）

覚えのある魔力を感じて、ラーは何を見るでもなくぼんやり外を眺めていた目を部屋へと戻した。

以前に感じたものよりも多少強い魔力を持っているようだが、波長は同じだ。
ソウルに言われた通り――いや言われなくてもだが――普段なら関わったりはしない。

（……さて）

このまま放っておけば、早々に誰かに見付かり騒ぎになるだろう。ソウルがわざわざ自分に頼んだぐらいだ、それはきっと避けたいはず。
ソウルの気配を探ってみると、ルクエールと共にいて動く様子は無い。魔力に乱れは無いから珍しく争っている訳ではなさそうだが。

（……全く）

人に頼んでおいてみすみす火種を逃がすとは何事か。甘いし間が抜けているし――

（仕方ない奴だ）

く、と苦笑して立ち上がる。彼を少し知る者がいれば目を見張っただろう。
自分の事にすら怠惰なラーが、自分と関わりのない事で動くとは、と。
だが勿論、ラーの中では矛盾していない。
相手は隠れながら慎重に移動しているようだから、慌てず歩いて行っても余裕で追いつく。辺りに自分より先に彼女に辿り着きそうな者もいない。
果たしてあっさり障害なく彼女の元まで辿り着き。

「――おい」
「っ！」
逃げられても逃がさないように十分間合いを詰めてから声を掛ける。すぐ側で掛けられた声にユイリは驚愕して勢い良く振り向いた。勿論辺りの警戒を怠ってなどいない。ただラーの魔力制御が彼女の感知能力を上回っただけである。

「あ……ッ」
「ここでウロウロしてると殺されるぞ。基本、俺達は人間に優しくないからな」
「……っ」
無感情に言われたラーの言葉はユイリには相当怖かっただろう。瞳に何の興味も映っていないのが余計真実味を与えてくれた。

「ついて来い」
「え……っ？」
「死にたいのか」
ラーにそのつもりはないが、まま脅しているセリフである。答えられずにいるユイリに溜め息をついてぐいとその腕を引く。

「あッ」
「大人しくしていろ。その方が多分お前は無事に帰れる」
「……大人しくしてたら、いつ離してくれるの」
「せいぜい十数分だ」
ソウルが動き出し、ユイリを探すまでの間だけだから。

「十数分って……」
「いいから来い」
うだうだと話すのが面倒になって、ラーは構わずユイリを引き摺って歩き出した。騒ぐようなら気絶させておこうと決めた。
「ち、ちょっと——」
無論連行されるユイリは慌てたが、力でも魔力でもラーに敵わない事は判るのだろう、無駄に暴れたりはしなかった。
出来ればソウルに渡せるまで、このまま黙っていてくれるといいのだが。

第四章　完全の羨望

（……何なんだろう）

部屋――多分私室だ――に連れ込んだきり、彼は自分に何もしてこなかった。声を掛けられた時の言い様を考えると、自分が魔王とその血族を暗殺しようとしている人間だと知っているのだと思ったのに。

いや実際、知っているのだろう。

（どうせ、マナフレアだ）

だってあの標的の一人はマナの事を知っていた。しかも自分と間違った。

（全然似てない）

自分はマナのような出来損ないではない。歴代の中でも強い魔力を持つ稀代の魔術師だと、皆が口を揃えて言うではないか。

（それなのに）

一日姿をくらましていたマナと魔界で会った。マナの居所になんか興味は無かったから、本当に驚いた。

そしてマナはその話を両親としていた。――魔族の王子の事と、暗殺の事。

（余計な事ばっかり！）

この仕事を請け負ったのは実はユイリの独断だった。魔王とその姪、そして半端者の魔族とを始末するだけで高位の魔族と契約させてやると。

どれだけ強大な力を持っていても、誇り高い魔族はそうそう人間と契約などしない。一族の長い歴史の中でも高位魔族と契約を交わした者は稀だった。だから歴史の中の誰よりも、強力な力を手に入れたかった。

(なのにあいつは)

ソウル、とその魔族の事を呼んでいた。親しげな愛称を許されて。

(ソールスティーリッヒ、それでソウル、か)

何が友人だ。半端とはいえ王族には違いない。自分でも喚べないような高位魔族と、あんな、あんな──

「……」

唇を噛みしめ、憤りに耐えるユイリを冷徹に見やって、ラーは自分が少し不快になっているのを自覚した。

ユイリはシュツィルオーレに似ているのだ。

ラーは力に溺れる者が好きではない。いやむしろ毛嫌いしている。幼い頃からラーの才は他の誰より飛び抜けていて、それを求めて取り入ろうとする輩は少なくなかった。

その筆頭こそ、母親であるシュツィルオーレだ。

自分が人間の女に負けたという、しかも死んだ今でも自分に正妃の座を譲らないソウルの母への嫉妬を、そのままソウルにぶつけるような幼い女だ。

ソウルがハーフであると、そういう言訳があるからこそ、体面を守

って余計きつく当たれるのだろう。
そのソウルにも実力で劣り、半端であると嘲りながら勝てない自分を誤魔化すため、ラーに媚を売りその力のお零れを得ようとする。
シュツィルオーレほど露骨でなくとも、大概の者はラーを恐れるか、取り入ろうとするかのどちらかだ。
仕方のない事だ。自分の性格にも問題がある事はラーとて判っている。
自分の人格を愛してもらえるような努力をしてこなかった。だから皆ラーを『力』としてしか見ないのだ。
——だがそれでも、肉親は自分を自分として愛してくれている。
父とソウルは『家族』だ。
家族の為ならば心を砕いて手を尽くしても惜しくない。

「……感謝するんだな」
「え……？」
「ソウルの頼みでなければお前は多分俺が殺してる。嫌いなんだ、お前のようなタイプは」
「ソウル……って、さっきの」
「汚らわしい」
「きゃっ」

その名を口にした途端、ばちと目の前で雷が走ってユイリは体を竦ませた。
「お前がソウルの名を気易く口にするなよ」
「っ……」

ユイリには勿論ラーがそこまで拘る理由など判らない。しかし自

分が可愛いのならば触れてはならない領域なのだけは判った。
「――ん」
「っ」
ぴくとラーが何かに反応して顔を上げるとびくとユイリも身を固くする。だがラーの興味はもうユイリには無い。
(動いた)
やっとこれでこいつを手放して大丈夫だ。
「おい」
「え」
呼び掛けられユイリは反射で顔を上げ、すぐ目の前に差し出されていたラーの指に仰け反った。パチン、と指を鳴らして一言だけで魔術を発動させる。
「メモリクラウド」
くら、と視界が揺らぐ。頭に靄が掛かり、思考が邪魔される。
――もう、何、も――
「ソウル、あれ」
「んッ?」
とりあえずルクエールとの話が落ち着いて、魔力を頼りにユイリ

を探して数分後。
くんとルクエールに襟首を引かれ方向を修正され、ちょっと苦しかったが黙ってそちらへ目を向ける。
そこにはぼんやりと床に座ったユイリが居た。
魔界、という異境の地で、しかも逃げている途中で、まさか休んでいる訳はないだろう。嫌な想像がぞっとソウルの頭を駆け抜けた。

「おい！」
「……あ」

呼び掛けられてのろのろと顔を上げて、二、三度瞬きをしてからはっとソウル達に気が付いた。

「――っ！」
「無事か！　無事だな！」

表情を強張らせ仰け反ったユイリの肩を掴み軽くその魔力を探って、特に異常が無いのを確認してからほっと安堵の息を吐いた。

「あ、え？」
「お前を気遣ったんじゃないわよ」

呆けたような素の表情になると、ますますユイリはマナに似ていた。それがまた面白くなくてルクエールは冷ややかに彼女を見下ろしながらそう言った。

「とにかくここでは誰に見付かったも不思議はない。来い」
「ちょ、ちょっと――」
「黙らないと黙らせるわよ」

本日二度目の強引な連行。一度目の連行は覚えていないが。

「……」

どうするべきか。ソウルに手を引かれながらようやくまともに動き出した頭でユイリは先の事を考えた。
十中八、九聞かれるのは依頼人の事。そう言っていたし。
言ってしまった方が安全なのは判っていた。そう言っていたし。不意を突いて一撃で仕留めればおそらくいけるが、正面切って戦うのは難しそうだ。二人だし。

（……けどそれはおこぼれで見逃してもらうってことでしょ）

アルバトラズ次期当主であるこの自分が、見逃してもらうなどと。

（絶対嫌）

自分はマナとは違う、と頑なにユイリは姉の事を否定した。他人に媚を売って生にしがみつく様な生き方はしない、と。

（だって私は違うもの）

ユイリは力で生きてきた。だから力が折れた時は——覚悟を決める時だ。
そうこうしているうちに階を変えてソウルの部屋に辿り着き、バタンとユイリにとっては牢に等しい扉が閉まる。

「別に取って食おうって訳じゃない。まぁ楽にしろ」

「……」

言われて勧められたソファに無言で腰掛ける。座り心地が柔らかくて気持ちいいのに腹が立つ。ユイリの態度の硬さに溜め息をついてから気を取り直して咳払いをして。

「初めに確認しておくが、ユイリ・アルバトラズで間違いないな」

「……ええ」

マナと会っているならここで首を横に振っても無駄だ。顔以上に魔力は嘘をつかない。血縁の波長は何となく判るのだ。

4—2

「お前達に依頼したのはどこのどいつだ」
「言うと思ってるの？」

勿論実際は『達』でもないがわざわざ修正してやる理由もない。ユイリの答えにソウルは顔をしかめた。彼女をどうこうする気は無い。しかし言葉にしたのは依頼人を話せば、という前提付きでのみ。にも拘らずなユイリの態度は正直、面倒くさい。

「殺されようと依頼人の秘密は厳守か？　大したプロ根性だ」
「それでもいいわ」

知らなければそう見えるかもしれない。的外れなソウルの言葉に、ユイリは歪んだ笑みを浮かべる。それが嘲った物を含んだ笑みである事はソウルにも当然通じてむっとする。

(可愛くない……ッ)
「お前、本当にマナの妹か？」
「よく言われるわ」

良い意味でも、悪い意味でも。

「でも姉妹だからって似る訳じゃない。私とマナじゃ出来が違いすぎるから」
「お前……っ」

あまりなユイリの言い様にソウルは次の言葉を言うまでに一瞬凍った。

「お前とマナは姉妹なんだろう。何とも思わないのか」
　自分とラーも腹違いではあるが、兄弟だ。一生必要ないだろうが、ラーが自分の手を借りる時が来れば出来る限り尽くしてやりたいと思うし、その力故に悪し様に言われているのを聞くと腹が立つ。だというのに、力が無いというだけでそんな言われ方をするのか。肉親にまでも。
「……」
「思わないわ。当然だもの」
（いや、確かに俺もラーが何考えてるのか判らんし親父も俺を良くは思っていないが。それでもそこまで言われた事は無いぞ。……他人にならとにかく）
　果たしてこいつが死んでマナは悲しむのか。多少手荒くしてもいいんじゃないかと、そんな囁きが胸を掠める。
「人も魔族も変わらないわね。どうするの、ソウル」
　ソウルのように憤りはしなかったが、呆れた調子でルクエールはそう尋ねた。正直、さっきよりも格段にユイリの存在はどうでもよくなった。
まずソウルが気に入るタイプではない。
「……正直追い返してやりたいが」
　しかし送り返してもまた来るかもしれないし。今度も上手く見逃してもらえる相手に見付かるかどうかなど、尚更判らない。

「こいつは吐きそうには無いしな」
「任せてくれれば吐かせてやるけど？」
「いらん」
ルクエールの提案は即行で拒否して、ソウルは腕を組んで考え込む。
「……仕方ないな。次の奴を待ってそいつに吐かせるとしよう。こいつはここに置いておく」
(次の奴なんか来ないけど)
けれどそう思うのは勝手だし、どうでもいい。別にアルバトラズにだって――それ程帰りたい訳ではないから。
ユイリにとって世界は、どこでも同じ。
「そう。なら私もここに留まるわ」
「ハァッ！？」
勢い良くルクエールを振り向くが、当然だと言わんばかりの表情で動じることなく視線を受け止められた。
「間違いが起こってからではこの女を殺しても遅いものね」
「起こるかァッ！」
「私となら間違いではないわよ」
「起こるかアァァァッ！！」
全身全霊、全力で拒否してもくすくすと笑われるだけ。何となくこれ以上何を言っても勝てない気がしてギリギリと歯を噛みしめ堪えてふんとそっぽを向く。

「言っとくがな！　勝手に人の寝室に入るなよ！　入ってきたら一生痴女扱いしてやる！」
「別に構わないわよ」
「っだアァァァ！　お前のそーゆー所が俺は大っ嫌いだっ！」
「お前のそういう所が私は大好きよ」

ぎゃあぎゃあと喚くソウルとそれを楽しそうにあしらうルクエールの二人を、冷めた目で見ながらユイリは苛々と手を組んだ自分の甲に爪を立てた。

(馬鹿だ。こいつ等)

こんな下らない事で騒げるんだから、間違いなく馬鹿だ。

(理不尽だわ)

なのにこいつ等は、何の努力もなくそれだけの力を持っている。
——こんなにも自分は努力しているのに。
ソウルとルクエールのやり取りはそれだけでユイリの心を波立たせた。もうそんな物を聞いていたくなくて、目と一緒に心を閉じる。
——いつものように。回り全ての雑音を消して。
……ただ、一人の世界へと。

(……朝か)

いつもより睡眠時間は短いのだが、体は規則正しくいつもの時間に眼を覚ました。
昨日何だかんだとルクエールと遅くまで騒いでいたせいで、まだ頭

も体も目覚めきれずにぼんやりしている。

……案外、悪くないものだった。下らない話で騒いで、笑うというのは。

（普通に話せるのはラーぐらいだったしな）

だがラーは馬鹿話をして騒ぐタイプではないので疲れる程に話す、という体験は初めてだった。

（あいつと、一緒にか）

悪くはない、が――

（それとこれとは別だけどな！）

一瞬過ったルクエールの愛人に収まるという想像をぶんぶんと首を振って追い出した。

（流され過ぎだ）

どれだけ喜んでいるんだと、気を引き締めて起き上がる――と。

「！」

ぴく、と微かな魔力に気が付いてソウルは顔を上げ窓の外を見る。知っていなければ、それが少し特別でなければ、気にも留めない程の微かな魔力。

（マナ……っ！？）

絶対の自信を持つ自分の感覚をも信じたくなくて、もう一度慎重に探ってみて、やはり間違いがないのを確認した。

（何故だ？　――ユイリか？）

ユイリの態度を見るにとても心配する・されるの関係になりそうにないが、それでも妹は可愛くて心配して来たのだろうか。

（全く！）

マナが来た所で何が出来る訳もない。人間であるというだけでマナ自身だって危ないのだというのに！

立ち上がって急いで身支度を整えると、その間にもマナは動いて城へと向かってきていた。扉の場所はおそらく以前と同じだ。

（ユイリの行き先が城だと――まあ判るか。他に魔界に来る理由なんか無いんだろうしな）

ルクエールに見付かるとまた煩そうだが、扉が開いても何の反応も無しという事はおそらくまだ寝ているのだろう。案外朝に弱いのかもしれない。

だがそうであれば彼女はマナの魔力など気にもしないだろうから、それは今ソウルにとって幸いだ。

（今起きていたらいつもは気にも留めんマナの魔力でも探るだろうからな）

いつもより二割は早いスピードで身なりを整えると、ソウルは部屋を抜け出し町へと向かった。マナもこちらに向かってきている分

だけ早く合流できるだろう。
幸い今は朝も早くて町にも人の姿は疎らである。

（いた）
「マナ！」
「――あ。ソウル！」

名前を呼ばれ気が付いて、マナは明らかにほっとした表情をした。

「っ」

友人だと、認めたからこその気易さだ。判っている。判っているのに一瞬鼓動が跳ねあがった。

（ななな、何だコレはッ！）

結構動揺が表にも出てしまっていたがマナはそれにも気が付かない。

「良かった！　ソウルに会おうと思ってたの！　ユイリが――私の妹がこっちに来たまま帰ってこないみたいで。多分お城に行ったんだと思うんだけど」
（やっぱり妹か）

あんな妹でも可愛いのかと、マナの肉親への愛情を感心すると同時に少し呆れた。

「ソウル？」
「いや、何でもない。心配するな。俺が預かってる」
「そうなの？　無事？」

「あぁ」
「そっか、良かった」
安堵の息をついてマナは微笑った。それを見てやはりアルバトラズの一族を傷付けてはならないと思った自分は正しかったのだと、面倒でもそうしておいて良かったとほっとする。
「お前、アルバトラズに依頼したのが誰かは聞いたか？」
「ううん。今回の事を受けたのってユイリだったみたいで。父さんも母さんも知らなかった。びっくりしてたわ」
「そうか。……まあ、そうだろうな」
むしろ納得した。今時魔族にケンカを売ろうなどまともな人間ならやらないだろう。何と言っても事は王の暗殺だ。
(そーいや今の今まで親父が殺されるとか考えてなかったがもし本当に親父が殺されたらこっちも黙ってられないんだな)
……ユイリはそれを判っていて受けたのだろうか。
(つーか依頼した方も方だぞ。万一成功したら人間と戦争でもする気なのか？)
そんな事をして何の得があるというのか。
(やはり他国の……いやそれは無い。ラーの見解だ。ほぼ間違いない)
「——まあいい。それなら何としてでもユイリに聞くだけだ。マナ、お前も来い」
「うん」

下手な事はしないと思うが、今ルクエールと二人きりだというのも少し心配だ。

マナを連れ――やや急ぎ足で城へと戻った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7553x/

ソウルスティール！

2011年11月24日15時53分発行